大 学 礼 拝

説 教 集

第 18 号

2014

東北学院大学

表紙の絵について

多賀城キャンパスの礼拝堂ではドイツの代表的なオルガン製作所のシュッケ社が手掛けたオルガンが荘厳な音色を奏でています。講壇の左側のバルコニーに設置され、左ケースには大きなパイプ（ペダルとシュヴェルヴェルク）が、そして鍵盤上部の右ケースには中型のパイプがきれいに整列し、その奥にも、合計で 1905 本ものパイプが礼拝の賛美に彩りを添えます。このオルガンは、2013 年のクリスマス・イヴに地元のテレビ番組（ミヤギテレビ『OH! バンデス』）でも取り上げられ、美しい音色を視聴者に届けました。このオルガンの上部に添えられた星形状のものは「ツィンベルシュテルン」と呼ばれ、製作者から寄贈された装置で、オルガンからは珍しく「ベル」の音を豊かに響かせます。

大 学 礼 拝

説 教 集

第 1 8 号

2014

東北学院大学

目次

巻頭言　宗教部長　佐々木哲夫……4

汚れた霊　理事長　平河内健治……7

東日本大震災、とくに大津波を経験して　院長　星宮望……13

熱くもなく、冷たくもなく　学長　松本宣郎……18

人間を照らす光　仙台広瀬河畔教会　望月修……24

〝八月〟という名の皇帝　仙台東教会　中井利洋……29

主にある信頼　仙台南伝道所　平賀真理子……34

イエス・キリストとの出会い　東北学院中学校・高等学校 宗教主任　松井浩樹……40

行ってあなたも同じようにしなさい　東北学院榴ヶ岡高校 宗教主任　西間木順……46

永遠の贖い　宗教部長　佐々木哲夫……52

心の眼を開いてください　大学宗教主任　野村信……57

敵を愛せ　大学宗教主任　原口尚彰……62
思い悩む、なんてもったいない　大学宗教主任　出村みや子……67
心の貧しさを知る　大学宗教主任　村上みか……73
アドヴェント（待降節）における謙遜の姿　大学宗教主任　原田浩司……78
幻なき民は亡ぶ　総合人文学科長　北博……83
Distracted by Love　文学部教授　マーチーデイビッド……92
十字架の愛　経営学部教授　松村尚彦……93
馳せ場を走る　工学部教授　星宮務……98
遊女の悲劇　工学部准教授　長島慎二……104
ある日の音楽礼拝　大学オルガニスト　今井奈緒子……109
人生を変える秘訣パートⅣ　教養学部准教授　大澤史伸……114
編集後記　大学宗教主任　原田浩司……120

巻頭言　「わたしは世の光」

宗教部長　佐々木　哲夫

「わたしは世の光である。
　　わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」

（ヨハネによる福音書　八・一二）

イエス・キリストが語った言葉です。「世の光」の言葉から東北学院校歌を連想します。一番目の歌詞を転記します。

若人われらの理想の国は

青葉の都よ　ああ東北学院
（おりかえし）
世の光　わがほこり いざほめよや　友よ
もろごえ　あわせて　われらの学院

これは、大正十年六月、神学部教授 E・H・ゾーグ先生の作詞作曲を中学部英語教師青木義夫先生が翻訳したものです。五番までありますから、折り返し部分は五回歌うことになります。その冒頭に「世の光」が記されています。ヨハネによる福音書の言葉は、イエス・キリストが自分自身を「世の光」に譬えたこと、また、「わたしに従う者は暗闇の中を歩かず命の光を持つ」ことを告げています。

三年ほど前に横手教会を訪れる機会が与えられ、横手教会の初代牧師、本学卒業生の中村月城牧師の次のような手記と出会いました。「私が卒業したのは、明治四十四年の三月、未だ中会の准允も済まぬ前に、横手開拓伝道の任命を受け、ゾーグ博士に伴われて横手町に乗り込んだ。横手には信者も求道者もいなく、一人の知人もなく、全くの未知の町。とにかく大町のある旅館に落ち着き、翌日から貸家探しに出歩いたが、容易に見つけることが出来なかった。空き家はあっても西洋人の

顔をみると断られたのである」（横手教会ホームページより）。

シカゴ大学神学部を卒業したゾーグ先生は、世の光であるイエス・キリストに従って東北学院に赴任しました。そのことは、校歌とともに彼の足跡が証しています。わたしたちも、世の光であるイエス・キリストに倣いつつ前進したいものです。この『説教集』がそのために用いられるようにと願う次第です。

「汚れた霊」

理事長　平河内　健治

ルカによる福音書　第十一章二十四～二十六節

24「汚れた霊は、人から出て行くと、砂漠をうろつき、休む場所を探すが、見つからない。それで、『出て来たわが家に戻ろう』と言う。25そして、戻ってみると、家は掃除をして、整えられていた。26そこで、出かけて行き、自分よりも悪いほかの七つの霊を連れてきて、中に入り込んで、住み着く。そうなると、その人の後の状態は前よりも悪くなる。」

只今読んだ箇所に、「汚れた霊」という言葉で表現された霊の働きが記されております。これは悪霊を指し、良き霊である「聖霊」などとは反対の働きをする霊であります。聖書に出てくる汚れた霊とは、聖霊とは異なり、罪の誘惑という働きをする実在する何かを指しているもので、その実体の存在を自然科学的に証明できるものではなく、私たちと神との良き関係を壊す働きをす

る何かを指していると捉えることができます。悪魔の誘惑と言われるものと同じ働きをするものと考えてもいいと私は思っております。

ある人が、私に働く霊が見えると言いました。少なくともお二人おりました。一人の方は邪気と良き霊は左右どちらかから出るので、よき霊の方に自分は立ち位置をとると言っておりました。どちらからが良くて、どちらからが悪い霊や気と言われるものが出ると言ったのかは忘れてしまいましたが、二人が共通して言うには、私には邪気とは異なる気があるのが感じられると言うのです。ある人は、私との面談で、私によき霊が輝くように出ていると感嘆したことがあります。私本人には何も見えず、感じることができません。邪気や悪霊に囚われていると言われたことはなく、知らぬが仏かもしれませんが、幸いなことであります。霊は見える人には見えるようです。私には見えません。掌に気を感じることは時にあります。科学的に証明はできませんが、霊的なものの存在を私は信じることにしております。見えない気を感じることができます。

ここには、汚れた霊は何らかの手段で追い出されても、また、仲間を連れて強化されて戻ってくることがあると記されています。汚れた霊に満たされた部屋は、清められ汚れた霊が追い出されたとしても、そこにできた空間が良き霊で満たされない限り、邪気や汚れた霊である悪霊が戻り、悪魔の誘惑に前よりも一層強く再び襲われ、神様との関係が断たれてしまうというのです。倍返

しに遭うというのです。

律法を守り、善行を行なったとしても、守り行なうことができず、どうしても悪魔の誘惑に陥り、自分の良心に従う行為をしようとしても、そのようにはならない人間の罪があり、自分の意志の力だけでは神の前に正しく立つことは不可能であることが示されていると言ってもいいかと思います。このことを認め、これを心から悔い、イエス・キリストのご自身の命を捧げて贖ってくださったという神から来る愛の救いに頼る信仰によってこそ、良き霊である聖霊の導きがあり、キリストと内において一体となることができ、イエスに倣う生活が可能になるということが示されています。

このことは宗教改革者マルティン・ルターが一五一七年の十月三十一日付けで、マインツの当時の大司教アルブレヒト・フォン・ブランデンブルク宛の手紙に同封した「九十五箇条の提題」の中に示されたものの中核となる信念でした。岩波新書の徳善義和氏の『マルティン・ルター――ことばに生きた改革者』の解説によると、ルターの提題は当時のカソリック教会に次のように問いかけたといいます。

「心の中の本当の悔い改めがなければ、どれほど一生懸命に罪の償いを果たしても無駄である。罪の償いは、死んで天国に入るその日まで続くものであり、人間はその絶望の中からしか神の恵

みを得られない。それにもかかわらず教会は、犯した罪の赦しが与えられると言うばかりか、『これを買えば大丈夫だ』と偽りの平安を告げながら、罪の償いまで免除されると言ってはばからない。（注:教皇の発行する贖有状があれば犯した罪が免除されるなどの行為を指す。）教会の行いは、ただ神の御心にのみ添うものであって、人間の我欲や利得とは一切関わりをもたないもののはずである。『教会の宝』とはひとえに、聖書の中に示されるイエス・キリストのことばと働き、すなわち福音ではないのか。」との問いでした。ある人は「自我のわざとしての信仰」ではなく、「私たちの中に働く神のわざとしての信仰」と表現しております。

これはロマ書にあるパウロの言葉「律法によっては、罪の自覚しか生じない…今や律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。…ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。」に要約されます。ルターはラテン語では「sola fide（信仰によってのみ）」と表現しています。

折角、無心や無私無欲という状態に努力して保っても空（くう）の状態にしても、良き霊である聖霊が働くよう求めなければ、再び悪魔の誘惑に陥る余地を作るというのです。イエスは、九節のところで、「求めなさい。そうすれば、与えられる」と私たちを勇気付けておられます。よく引用される聖句ですので、皆さんにも親しみのあるキリストの言葉です。しかし、それは決して

自分の都合のよいご利益を求めると、そのようになるというのではありません。十三節にあるように、「天の父は求める者に聖霊を与えてくださる」のです。神に祈り、求める者に聖霊が約束されているのであります。聖霊は人格として働く導き手であり、神への信仰、イエス・キリストの十字架による罪の赦しへと導き、私たちの存在をキリストと一体とさせてくださいます。それによってキリストに倣う生活ができるようになります。

私は身体的に疲れると時に恨んだり欝になったり、邪気や汚れた思いを持ちがちであることを感じることがあります。ストレスが溜まりがちな日頃の鍛錬方法として、深呼吸で新鮮な気を思いっきり吸い込み、悪い気を呼気として吐き出し、その時同時に良い気が吸い込まれるというイメージで心を落ち着かせることがあります。吸う時も吐くときも良き気で満たされるようにするわけです。

無心や無私無欲だけでなく、何らかの形で聖霊の働きを祈り求めることが大切であることを今日の聖書から学ぶことができます。聖書の学びや礼拝や体を通しての日頃の鍛錬がそのことを可能にしてくれます。現に、礼拝の奨励で与えられた聖書の言葉から直ぐに皆さんに伝えるメッセージが生まれてくるわけではないことを奨励のたびに感じ、祈り求めた時に与えられるのを体験しています。今朝の大学礼拝の聖書の箇所は先月中高礼拝でも与えられ、不思議にも榴ケ岡礼拝奨

励でも与えられた箇所です。ここに神様の思し召し、特別の意味があり、単なる偶然ではなく、聖霊の働きがあることを信じ、この大学の礼拝においても選ばれたもの、与えられたものと信じて、今朝は学んできました。

聖霊の働きが常に私たち自身に臨むことを共に祈りたいと思います。

「東日本大震災、とくに大津波を経験して」

院長　星宮　望

詩編　四十六編二～四節

2 神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。
苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる。
3 わたしたちは決して恐れない
地が姿を変え
山々が揺らいで海の中に移るとも
4 海の水が騒ぎ、沸き返り
その高ぶるさまに山々が震えるとも。

本日拝読した旧約聖書に記述されている地域は、ご存知のように、中東地区の中でも現在のイスラエル、エジプト地域が主です。この地区はほとんどが荒涼とした荒れ野で、砂漠地帯もあり

ます。海からは、かなり離れていて、津波が来るようなことはほとんどありません。しかし、この詩編の記述は珍しく地震が発生して津波が押し寄せても、神様を信頼するということが記されています。今日は、この聖書の記述をきっかけとして、東日本大震災、とくに大津波を経験したことについて考えて見ましょう。

二〇一一年三月十一日には、これまで想定もしていなかった巨大な地震と、それに引き続く大津波、そしてその後の、予想もしなかった福島第一原子力発電所の大事故が発生しました。この大震災を経験した後には、皆さんそれぞれにいくつかの疑問を持った方が多いのではないでしょうか？

そのことに関連して大切なことを示してくださった方がおりましたので、ここでは、そのことを紹介しながら考えて見ましょう。キリスト教雑誌「信徒の友」二〇一一年一〇月号（三〇‐三三頁）に岩手カトリック大船渡教会信徒で医師の山浦玄嗣氏の講演報告が掲載されておりました。ここで山浦氏が述べられたことをまず紹介します。大震災から「少し落ち着くと、私のところにテレビ、新聞、雑誌のインタビューが殺到しました。私が医者だからではなく、ケセン語訳聖書の著者だからです。彼らは皆、判で押したように、『東北の人は非常に我慢強く、正直で善良である。こういう人たちがなぜ、このような目に遭わなくてはならないのか。神さまはなぜこの

ような酷い目に遭わせるのか。信仰者として今回の出来事をどう考えるか』という質問を投げかけてきました。私は髪の毛が逆立つくらい腹が立ちました。私はそんなことを一度も考えたことがありません。あの惨害の最中に何千人という気仙の人間を診ました。連れ合い、親、子どもを亡くした人たちの話を聞いて一緒に泣いてきました。でも、『なして、おらどアこんたな目に遭わねアばならねアんだべ』という恨み言を聞いたことはただの一度もありません。」との記述があります。また、その後に、「・・・人は皆死ぬようにできています。・・・人生は災害の連続です。・・・人が死ぬのは本当に悲しいです。そして、それとは別に災害が起こるのも当たり前のことです。この世界はそのようにできています。『なぜ』と問うこと自体意味がありません。」「生物はとても保守的にできていて、自分と同じような子孫を残すように遺伝子が働きます。ところが、ときどき出来損ないができます。これを突然変異といいます。環境の激変で親世代が死んでしまっても、新しい環境にはこのほうがかえって有利であることがあり、これが生き延びます。・・・そうやって災害のたびに生物は進化するのです。だから、人間はあらゆる生物の出来損ないの集大成とも言えるのです。このおかげで私たちは神さまを知るにいたったわけです。」と続けておられます。大変重要なお話と思います。

ところで、今回の東日本大震災に遭遇して、大きな困難を経験した方々七十一人の手記をまと

めた「3．11　慟哭の記録」（新曜社／金菱清編）という本が出版されたことを覚えている方も多いと思います。これは、東北学院大学・金菱清・准教授のゼミを中心とした「東北学院大学震災の記録プロジェクト」の活動記録で、大きな反響を呼び、フジＴＶのドキュメンタリーの特番としても放映されました。そして、それに引き続いて、もう一冊「千年災禍の海辺学―なぜそれでも人は海で暮らすのか―」（生活書院／金菱清編）という本が同ゼミナールの研究成果のまとめとして出版されました。ここに記されている記録を拝見すると、大津波などで甚大な被災をされた方々の複雑な思いが伺えます。単純な恨み言などではなく、海の恵み、自然との共生などを無意識の内に持っているなかでの思いが伝わってきます。いいかえれば、さきほど紹介した山浦医師が話された内容にも即しているように思います。

一方、聖書には、いくつかのなかなか理解できないような記述があります。一例をあげますと、旧約聖書の「ヨブ記」には、「ウツの地にヨブという人がいた。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きていた。」というヨブが信じられないような多くの災難・艱難に遭遇し、すべての財産、親族を失うことになりました。しかし、それにもかかわらず、神さまへの恨み言を言うことなく、最後まで信頼を失わなかったという長大な物語です。もし、読んでいない方は、ぜひ読んでいただきたいと思います。旧約聖書の中間部分で、ここで拝読した詩編の前にあり、新共同訳聖書で

約六十ページの長編物語です。

他方、自然科学分野では、ＤＮＡ、免疫などの微細機構、あるいは、超高度電子デバイスにおける荷電粒子の振る舞いなどのミクロから、大宇宙のマクロ現象まで、人知を超えた究極の自然の仕組みを知れば知るほど、全能の神の存在を心から受け入れるようになるといわれていますし、私もそのように思います。創造主のみ業に心からの感謝の念をもって生活してゆきたいと思います。

（平成二十五年四月）

「熱くもなく、冷たくもなく」

学長　松本宣郎

ヨハネの黙示録　3

14ラオディキアにある教会の天使にこう書き送れ。『アーメンである方、誠実で真実な証人、神に創造された万物の源である方が、次のように言われる。15「わたしはあなたの行いを知っている。あなたは、冷たくもなく熱くもない。むしろ、冷たいか熱いか、どちらかであってほしい。16熱くも冷たくもなく、なまぬるいので、わたしはあなたを口から吐き出そうとしている。17あなたは、『わたしは金持ちだ。満ち足りている。何一つ必要な物はない』と言っているが、自分が惨めな者、哀れな者、貧しい者、目の見えない者、裸の者であることが分かっていない。18そこで、あなたに勧める。裕福になるように、火で精錬された金をわたしから買うがよい。裸の恥をさらさないように、身に着ける白い衣を買い、また、見えるようになるために、目に塗る薬を買うがよい。

「ヨハネの黙示録」は新約聖書の末尾に置かれるだけあって、他の新約文書のどれとも似つかない特異な文書です。大部分は天空を舞台に繰り広げられる壮大な、映像的な描写のドラマです。それは映画のスペクタクル、あるいはＳＦの世界のようにすら感じられます。

キリストの愛した弟子ヨハネが高齢になったころ、エフェソで、神から得た啓示を書き記したと、一章冒頭で語られています。その啓示は「黙示」と言われています。神が人間に伝えたいことを、一見不可思議な言葉や幻で示す、というこの表現形式は、ユダヤ教文書の一つの分野であり、旧約の「ダニエル書」などがその例だと言われます。

けれど「ヨハネ黙示録」の最初の三つの章はまだプロローグで、「アジア州」、今の小アジア半島、アナトリアとも呼ばれる地方、現在のトルコ共和国の西方、エーゲ海寄りの地域にあった七つの町の教会に宛ててヨハネが送った神の言葉、となっています。エフェソには異端と戦ったことをほめ、スミルナにはユダヤ人から受ける迫害に耐えるよう励ます、など、教会ごとに異なる内容となっています。私たちはこれらの手紙を、他の新約文書の書簡と同じように、私たちに宛てて語られた言葉としても読むことが出来ると思います。本日は「ラオディキアにある教会」への手紙を取り上げました。ここでは、「熱くも冷たくもなく、なまぬるい」ことがとがめられています。そのことを考えてみたいと思います。

さて、ラオディキアという町は、「黙示録」で挙げられた町の中では内陸に位置していました。主要な街道沿いにあったので物産の動きが便利で、羊毛の織物生産地として有名になり、豊かな町でした。そのことは一七節からもうかがえます。神はラオディキア人が、一切欠乏を感じないほど金持ちだと豪語している、と見ているのです。またこの町は何かの薬品の生産でも知られていたようです（一八節）。

そのような町に教会をもつラオディキア人に、「あなた方の行いは冷たくもなく、熱くもない。なまぬるい。冷たいか熱いか、どちらかであれ」、と神は告げるのです。

「行い」とはありますが、熱さ、冷たさで言われているのは、キリストへの信仰の姿勢であると考えてよいと思います。これはよく分かる言い方です。現代の私たちの間でもありそうな表現です。そういえば、今年の仙台、東北は、プロ野球チームの優勝で、ずいぶん「熱く」なったではありませんか。応援に燃えなければ仙台人ではない、というような雰囲気がありました。

ラオディキア人へのとがめにもどると、キリスト教徒であるからには、熱心に求め、祈り、行うようであってほしい。いい加減な信仰生活で過ごすくらいなら、いっそキリスト教を否定する多神教徒であるほうがましだ、と諭されている、という取り方をされてきました。しかし、近年の聖書解釈によると少し違う指摘をする人が多いようです。すなわち、ここで「熱い」と同様「冷

たい」も悪いと言われているのではない、重大なのは「なまぬるい」ということなのだ、と。確かに、「冷たい」が英語でcoldなら、冷淡とか冷酷とか、いい意味はないのですが、これをcoolと訳すと、「涼しい」に加えて冷静、理性的、そしてかっこいい、という意味まで持つことになります。まあ「冷たい」の意味についてはここまでにしておきましょう。

「なまぬるい」ラオディキアのキリスト教徒とはどういう人々なのか。彼らはキリスト教信仰についても教会についても知っていますが、富やそれを獲得する仕事の方が神よりも大事だという生活をし、人間の罪深さや真の貧しさとか、キリストによる罪の贖い、などを深く思うことのない人々、ということでしょう。ぜいたく品を買い集めるのには熱心でも、ひたすら神を求める教会の生活は二の次、という人々です。

神は「なまぬるいので、わたしはあなたを口から吐き出そうとしている」と言います（一六節）。「口」に入れる、というイメージがやはり黙示文学的かもしれませんが、「吐き出す」というのはただ事ではない、と捉えるべきでしょう。神と富と二股かけるような人間など神は関わらない、との断絶の宣言なのです。

ラオディキア人はこの宣言に立ちすくんだでしょう。では、この手紙が、今私たちに向けられている、として、私たちの信仰生活は「熱い」でしょうか、それとも「なまぬるい」でしょうか。

「熱い！」と答えられる人は、実はほとんどいない、という思いがします。特に日本人はそうかも知れません。教会に行くより仕事を優先させるとか、聖書よりも俗世間的な価値判断で物事を処理しがちだ、とか「なまぬるさ」現象を数え上げたらきりがないかも知れません。でも、神は「なまぬるいので、わたしはあなたを口から吐き出そう」、もうあなたは去ってしまえ、と言われるのです。

しかし神は、なまぬるいラオディキア人に、悔い改めの機会と方法を用意しておられます。なまぬるさを自覚する私たちにもそうなさらないはずはありません。熱くなりたいものです。そのとき、忘れてならないのは、私たちがキリストにひたすら頼り、従う、ということです。なまぬるさは私たちの弱さ、究極的には罪のゆえなのです。抜け出すことは実は自力では出来ないのです。だから、人類の罪を一身に引き受けて、身代わりとなって死んで、しかし復活したキリストに助けを求めるのです。熱心に、「熱く」求めるとき、それが認められないはずはない、と信じるのです。

本日の「黙示録」3章をさらに読み進むとそのことが暗示されていることがわかります。「だから、熱心に努めよ。悔い改めよ。見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう」（一九、二〇節）。キリストから手を延べてくださるのです。私たち

は熱くなれるのです。

祈り：私たちの主、イエス・キリストの父なる神さま。弱さと愚かさを自覚する私たちです。神を信じることにおいて、あなたの目からは「なまぬるい」としか見なされないと思います。けれど、私たちは救いを求めます。どうか熱くキリストを信じ、頼るようであらせてください。戸を開けさせてください。この切なる願いを、尊き主、イエス・キリストの御名によってお捧げいたします。

「人間を照らす光」

仙台広瀬河畔教会　牧師　望月　修

ヨハネによる福音書　第一章一節～四節

1初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。2この言は、初めに神と共にあった。3万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。4言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。

まもなくクリスマスを迎えますが、今読みました「ヨハネによる福音書」には、私たちがよく知っているようなクリスマスの話はありません。世間でよく知られているキリスト誕生の話は、聖書の中では、実は僅かな記述しかなく、ほんのエピソードのようなものだ、と言ってもよいほどです。「初めに言があった」（一・一）。「ヨハネによる福音書」は、キリストの誕生物語を取り上げることなく、このように書き出しました。何となく哲学的な言葉使いです。「初めに」というのは、時間的な最初ばかりでなく、物事の根源において、という意味があるそうです。いちばん深い意味において、と言ったらよいかもしれません。例えば、宇宙の成り立ちの初めにビッグバンがあっ

た、という学説があります。時間と空間の区別がつかない一種の「無」のような初期の状態から、宇宙が忽然と誕生し、爆発的に膨張して、現在のようになった、と説明するのです。そう言えば、旧約聖書の創世記の冒頭に、「初めに、神は天地を創造された」（一・一）とあって、「地は混沌であって、闇が深淵の面にあった」と告げています。神は、無から、この世界を創造され、混沌や闇のように意味を持たない世界に、神が意味や目的を与えている、との信仰を言い表しています。そのような初めにおいて、しかし、「ヨハネによる福音書」は、「言があった」と告げました。

この「言」とは、一体、何でしょう。誰もが気づくのですが、言（こと）の葉（は）の言葉でなく、一字の「言」となっていることです。元の字は、ロゴスというギリシア語です。当時のギリシア哲学などによく使われた、特別な意味を持つ概念ですが、それ以外でも使われ、様々な意味があります。新約聖書でも、ここ以外でも、時々、使われています。そういうことから、この福音書が書かれた当時、これを読んだ人たちは、ここで、この字が使われていることで、一体何を伝えようとしているかが判ったに違いありません。

それは、「福音」のことでありました。あるいは、もっと端的に「キリスト」のことでありました。初めに「福音」があった。あるいは、初めから「キリスト」がおられた、です。つまり、物事の根源に福音がある。物事を成り立たせているのは、キリストである、ということです。

このことは、単なる学説ではありません。単なる哲学的な概念でもありません。信仰における確信です。そして、その内容からして、もっと適確に言えば、この世界を成り立たせているのは、キリストの十字架である、ということです。キリストの流された血が、この世界を贖い、救うのだ、との信仰であります。私たちを生かし、保ち、ついには、本来の在り方へと再生させるのは、神がお遣わしくださったキリストの十字架の犠牲なのだ、ということです。

そのように、この福音書は、このロゴスという字によって、「福音」や「キリスト」、わけてもキリストの十字架による世界の救いを証ししようとしています。哲学的な知識が重んじられていた時代でした。そういう当時の哲学的な思考や合理的な考え方を、向こうに回した、驚くべき発言をしている、と言ってよいでしょう。

私たちは、伝道者パウロが、次のように宣言していることを思い起こすことができます。「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。」（Ⅰコリント一・一八）。

キリストが十字架の上で死なれたことは、生涯の終わりにあったこととして、それぞれの福音書は、その記述を、最後の部分に、位置づけています。この「ヨハネによる福音書」も例外ではありません。そればかりか、そのことをめぐる記述は、他の福音書に比べても、たいへん多くを

裂いています。しかし、ヨハネは、何故、そのことを、この冒頭において、わざわざ「初めに言があった」と言って、いきなり、話題にしたのでしょうか。それは、キリストの十字架こそ、先ほど申したように、もっとも重要な事柄であったからでもありますが、ヨハネの関心は、もっと先にありました。それは、「命」そのものです。キリストの十字架の死によって贖われる「命」そのものにこそ、深い関心を寄せていたのであります。つまり、時間的な順序よりも、あるいは思想や考え方よりも、それにもまして、「命」そのものについて、関心があったのであります。その「命」を、今、本当に生きることができるか。また、そのために、今与えられている命が、どのように救われるかです。

したがって、「言の内に命があった」（一・四ａ）と告げていることです。この「言」、イエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリスト以外に、私たちに、真の「命」をもたらすものはない。この「言」、イエス・キリストとの関わりを断ち切ったら、あなたがたは「命」を失う。キリストの十字架のお陰で、罪に覆われた私たちの「命」は贖われ、本当に生きることができるのだ。そのように、「命」そのものに関わる救いなのだ、ということであります。

そのように「命」を救う事柄が、この「言の内にある」。まさしく、「言の内に命があった」（一・四ａ）であります。

神に造られた私たちは、この「命」を受けて、始めて本当に生きる意味や目的を見出すことができます。だから、この命は、「人間を照らす光」（一・四ｂ）なのであります。

まもなく、クリスマスを迎えます。クリスマスを迎える準備が、いろいろな仕方で始まっています。そのような中でも、暗闇に輝く光は、クリスマスを象徴している、と言ってよいでしょう。私たちに、希望があることを、思い出させます。

しかし、私たちは、このクリスマスを、命を生きるということ、命そのものをめぐって、どれだけ考えているでしょうか。一時の楽しみ、慰めぐらいにしか、思っていないとしたら、少し寂しい、と思います。街頭の光と違って、神のもとから射し込んで来る、この「光」は、私たちの悪と罪を明らかにするでありましょう。しかし、そうであっても、この「光」は、私たちに真の「命」を与えるものとして、私たちを照らすのです。

「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」（八・一二）。クリスマスの日にお生まれになられた、神の御子は、その後、このようにはっきりと仰せになられたことが、この福音書の中に、記録されています。闇の中に、「命の光」として輝く、この命の「言」に照らされ、導かれてまいりたいと思います。そこに、「ヨハネによる福音書」が告げるクリスマスがあるのであります。

「〝八月〟という名の皇帝」

仙台東教会　中井利洋

ルカによる福音書二章一～七節

1そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。2これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。3人々は皆、登録するためにおのおの自分の町へ旅立った。4ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。5身ごもっていた、いいなずけのマリアと一緒に登録するためである。6ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、7初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。

教会的にはもう降誕前と言って、イエス・キリストのお誕生を待ち望むクリスマスの準備が始まる時候となりました。この時期に〝八月〟という名前の皇帝の話をクリスマスによく読まれる

聖書箇所からお話をします。

みなさん、世界には自分の名前を暦につけてしまった人がいるのです。ピラミッドが王家のお墓であるとか古代日本の古墳の大きさが支配者の影響力に比例するとか、権力を持つ人は、自分の名前を残そうとするものらしいのです。自分を神としてしまって永遠に生き続け、その権力もずっと続くものだと信じるようですが、世界史のどのページを見ても、権力者が永遠に生きたことなどなく、必ずや滅びてしまうものです。

イエス様のいらしたころ繁栄したローマ帝国という国、それはイエス様がお生まれになった二千年前に最盛期を迎えました。その初代皇帝は本日の聖書箇所に出てくるアウグストゥスです。アウグトゥスという人は、体は丈夫ではなかったようですが、人の能力を見定めることに長けていました。各部門に優秀な部下をそろえて、そのおかげで四十年近く長い間権力の座にありました。(記録によると紀元前六十三年九月二三日 紀元一四年八月一九日77歳で死亡。在位：紀元前二七年－紀元一四年。在位期間四一年)。ローマ帝国初代皇帝としての地位を全うしたのです。その代表的な政策のひとつが、イエス様のお誕生に関わる人口調査です。これは、日本で行われている国勢調査とは違っていろいろな意図を持つ政策です。しかも、ローマ帝国が征服した属国としてのイスラエルは全くの小国ですが比較的豊かな国でしたので、ローマ帝国の施策は行き届いてい

ました。この人口調査は税金をもれなく納めるということ、そして戦争が起きた時に兵隊を準備するための政策でもありました。誰が誰を先祖として、今どこに住んでいるか、そのようなことを確定する作業です。今から2千年前、いい意味でも悪い意味でもこのような優れた政策を考え、実行したアウグストゥスという人の偉大さを記すためにルカによる福音書の著者は、本日の聖書箇所に彼の名を記したのです。

ローマ帝国に付されたパックスロマーナ―いわゆる「ローマの平和」という言葉がありますが、それは、いい意味での平和ではなく、強権力のもたらす一種の恐怖政治を指しています。アウグストゥスの号令で、イスラエルの人々は国中をひっくり返されるほどの民族の大移動が行われたのです。その影響でイエス様を身ごもっているマリアとヨセフは長い旅を強いられました。イエス様は馬小屋で人間としての命を与えられた後も、イスラエルの権力者ヘロデ大王に追われるがごとく、エジプトにまで行かなければならない羽目に陥りました。

世界史の年表にも記されているような人間の歴史上の出来事。横軸の出来事。そして、神がその独り子をお与えくださったという天から地への出来事、縦軸の出来事がここで起こったのです。横軸と縦軸、それはイエス様のおかかりになった十字架を表しています。地中海が「地の中の海」「世界の中の海」と今でも呼ばれているように、当時の世界はまさしく地中海を取り囲む地域のこ

とでした。その中で、戦争などを代表とする人間の罪の歴史の出来事と、その罪から救ってくださるイエス・キリストの出来事が交錯しているのです。まさに、聖書に書かれていることは、神の歴史の出来事ですから、みなさん、見逃すことなく読み続けてください。

さて、アウグストゥスは、ほかにも様々な政策や決まりを考え出しましたが、その中で現在でも私たちが用いているのは、暦です。当時の月の満ち欠けによる暦ではなく、いわゆるユリウス暦を定めたのです。一月から十二月の名前のうち、七月はローマの将軍ジュリアス・シーザー「July」、そして八月に自分の名前をつけてしまいました。シーザーは当時でもすでに歴史上の闘将でしたが、自分の権力を後世に残す誘惑に耐えがたく、みなさんもご存知のように、八月は「August」なのです（スペリングを覚えるのに「アウグスト」と発音した記憶はありませんか？）。アウグストゥス。なぜ、アウグストゥスが8月に自分の名前をつけたのかは謎です。体が弱かった彼が夏を好きだったわけでもないし、七月生まれのジュリアス・シーザーは七月に生涯のもっとも大切な戦いが七月であったということですが、アウグストゥスにはそんなこともありません。ただ、彼が死んだのは八月であり、そのことは印象的です。八月に「August」という自分の名前をつけたローマ初代皇帝アウグストゥスは、その生涯を八月に終えたのです…。

私たちが何気なく過ごしているこの日常にこそ、世界の歴史が眠っているし、見逃してはなら

ないことがあるのです。そして聖書の中にも罪ある人間の歴史に介入してくださった神様の出来事があります。ぜひ、この学び舎で、あるいは教会で、そのことに出会っていただきたいと願います。

お祈りします、恵みに富みたもう主なる神様、こうして若い方々にお話しできる幸いを感謝します。世界の歴史の中でも神の計画が働き、私どもも神の必然の中で、ご計画の中で生かさせていただいていることを深く感謝いたします。若い方々のそれぞれの生き方が主によって守られ、支えられ、導かれますように。この時を感謝して、イエス様のお名前によってお祈りいたします。

「主にある信頼」

仙台南伝道所　平賀　真理子

フィリピの信徒への手紙二章十九～二十四節

19さて、わたしはあなたがたの様子を知って力づけられたいので、間もなくテモテをそちらに遣わすことを、主イエスによって希望しています。20テモテのようにわたしと同じ思いを抱いて、親身になってあなたがたのことを心にかけている者はほかにいないのです。21他の人は皆、イエス・キリストのことではなく、自分のことを追い求めています。22テモテが確かな人物であることはあなたがたが認めるところであり、息子が父に仕えるように、彼はわたしと共に福音に仕えました。23そこで、わたしは自分のことの見通しがつきしだいすぐ、テモテを送りたいと願っています。24わたし自身も間もなくそちらに行けるものと主によって確信しています。

今日の聖書の箇所では、パウロのテモテに対する信頼が表れていますね。また、この手紙の宛

先であるフィリピの教会に対しての信頼も滲み出ていますね。

フィリピの町に、イエス様の福音を信じる人々の教会が出来たのは、パウロの伝道旅行によってです。信仰の目で見るならば、フィリピの町に教会を造られたのは、神様の御心によるものと言うことができるわけですが、その御心に従って、この世で実際に、そのために働いたのは、パウロです。ですから、パウロの心の中では、伝道旅行の実りとしてのフィリピ教会に対する信頼と愛情はとても大きかったと言えるでしょう。実際、このフィリピの信徒への手紙は、「喜びの書簡」として良く知られています。福音伝道によってパウロは多くの苦難を味わうわけですが、自分に苦難が振りかかればかかるほど、主と仰ぐイエス様の十字架という最大の苦難に近づくことを許されているという喜びが増し加わるという思いに至っているからです。権力者に逮捕されたり、町の人々から出て行ってくれと言われたり、ユダヤ人に誹謗中傷されたりという苦難は、信仰がなければ、「しなくてもいい苦労」と言えるものでしょう。しかし、「主によって伝道する使命を与えられている！」という篤い信仰に突き動かされているパウロにとって、そんな苦難の数々は、十字架の主との結びつきを深めることであり、深い感謝につながるわけです。そして、信仰を同じくするフィリピの教会、様々な苦難に直面しても支え続けた教会の信徒達には、その感謝の思いを理解して共に歩んでもらえるという全面的な信頼の上に、この手紙は成り立っています。

同じ主への信仰を持ち、また、自分の思いも共感してもらえるという信頼できるフィリピの教会に対して、パウロは、さらに、最も信頼できる同僚のテモテを派遣したいという希望を語ります。これはパウロの個人的な希望ではなくて、主の御心として、パウロに示された確信だったのでしょう。この手紙を書いている時、パウロは、伝道したことによって逮捕されて「獄中にいる」と書いています。生きて世の中に出られないかもしれず、「死」をも考えなければならない状況であることが、このフィリピの手紙の一章から読み取れます。そんな中、パウロがまず気にかけたのは、自分の生死よりも、主から託された福音伝道のことでした。具体的に言うなら、信仰が育つのを直接見届けられないまま立ち去らなければならなかった教会の行く末を心配し、神様の望まれる良い方向へ教会の人々を導きたいという願いだったということです。獄中から生きて出られないかもしれない自分の代わりに最も信頼できるテモテをフィリピの教会へ送りたいという思いが与えられたのです。

パウロから同じ情熱を持っていると見なされたテモテでしたが、実は、その情熱の方向が問われていました。自分自身に向いているのか、教会の元々の創始者であるイエス様を向いているのかと言うことです。自分自身が評価されたいから働いているのか、主イエス様の栄光のために働いているのかということです。

二一節には、多くの者が「自分のことを追い求めている」とあります。このことは、福音伝道に励む人でも、実は、自己実現のために、その仕事を利用している者が数多くいるとパウロが見抜いていたことを暗示しています。そんな中で、テモテについては、イエス様とその福音のために仕えたとパウロは評価しています。その評価を表す言葉として、「確かな人物」と二二節にあります。この言葉は、人を推薦する時などに良く使う、聞きなれた言葉であり、素通りしてしまいそうな言葉です。しかし、留意すべき言葉です。この言葉には、苦難を乗り越えた後に示される品格という意味があります。テモテは、パウロの二回目以降の伝道旅行に同行していますが、迫害や飢え、渇きなどの様々な苦難を経験し、そんな中で、主への信仰が磨かれていったのだろうと推測できるでしょう。そのような苦難について、信仰のない者は不平不満を言ってイヤイヤ我慢しようとするでしょう。しかし、本物の信仰者はそうではありません。苦難は、神様が私に必要なものとして与えてくださるものだという信仰を持って受け入れようとするのです。そういう信仰者の目で見るならば、「苦難」は「試練」とか「鍛錬」と言う言葉に置き換えることができるのではないでしょうか。そして、神への感謝の中で、試練・鍛錬によって打たれ続けることを通して初めて、人間は、「自分のことを追い求めてしまう」という根深い罪の状態から、「すべては神の栄光のために！」という思いへ清められていくのではないでしょうか。

ここで、私は皆さんが自分のことを追い求める努力を否定しているわけではありません。努力した結果、向上できるのだと思います。ただ、その前に、神の御心を尋ね求めることが優先されるべきであり、そして最後には努力の結果の評価を、誰にしてもらいたいかと思うかが問題なのです。どんなに立派な人でも、人間であれば、その評価には限界があり、皆さんのすべてを見抜くことはできません。誰かが皆さんによい評価をしたとしても、それは本当に一面的です。

神様だけが人の心を見抜く御方であり、時に応じて、試練・鍛錬を与えてくださり、人間として成長させてくださる御方です。私達人間は、「苦労が無く、何でも自分の思い通りになる人生」を、ついつい望みますが、それでは、本物の神の国の民になることは難しいのです。聖書の中には、試練・鍛錬を通して「確かな人物」になれることについて、御言葉が幾つかあるのですが、今日はこの御言葉をご紹介します。

ヘブライ人への手紙十二章五～六節と、（少し飛んで）十一節です。

「わが子よ、主の鍛錬を軽んじてはいけない。主から懲らしめられても、力を落としてはならない。なぜなら、主は愛する者を鍛え、子として受け入れる者を皆、鞭打たれるからである。……およそ鍛錬というものは当座は喜ばしいものではなく、悲しいものと思われるのですが、後になるとそれで鍛え上げられた人々に義という平和に満ちた実を結ばせるのです。」

テモテは、試練・鍛錬によって「確かな人物」になり、主イエス様の栄光と福音伝道の為の働きを、祝福してもらえるようになりました。そして、主への信仰を出発点とし、主の栄光を達成すべき終着点とすることに於いて、パウロと一致して、共に主を頭と戴くという良い関係を築きました。それで、「パウロが父親で、テモテが息子という理想の親子のような関係になった」とパウロは表現しています。「父と息子」、これは「父なる神様と御子イエス様」との関係になぞらえた、本当に祝福された関係を示しています。

限りある人間の思いや評価ではなくて、全てを御存じの神様からの祝福に目を向けた人生になるように祈り求めましょう。そうして初めて、人間同士の関係も、「本当に心の底から信頼できる」という、神の平安に近づくことができるようになるのです。

「イエス・キリストとの出会い」

東北学院中学校・高等学校 宗教主任　松井浩樹

マタイによる福音書　二七章二七節～四四節

27それから、総督の兵士たちは、イエスを総督官邸に連れて行き、部隊の全員をイエスの周りに集めた。28そしてイエスの着ている物をはぎ取り、赤い外套を着せ、29茨で冠を編んで頭に載せ、また、右手に葦の棒を持たせて、その前にひざまずき、「ユダヤ人の王、万歳」と言って、侮辱した。30また、唾を吐きかけ、葦の棒を取り上げて頭をたたき続けた。31このようにイエスを侮辱したあげく、外套を脱がせて元の服を着せ、十字架につけるために引いて行った。

32兵士たちは出て行くと、シモンという名前のキレネ人に出会ったので、イエスの十字架を無理に担がせた。33そして、ゴルゴダという所、すなわち「されこうべの場所」に着くと、34苦いものを混ぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、イエスはなめただけで、飲もうとさ

れなかった。35彼らはイエスを十字架につけると、くじを引いてその服を分け合い、36そこに座って見張りをしていた。37イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王イエスである」と書いた罪状書きを掲げた。38折から、イエスと一緒に二人の強盗が、一人は右にもう一人は左に、十字架につけられていた。39そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって、40言った。「神殿を打ち倒し、三日で建てる者、神の子なら、自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。」41同じように祭司長たちも律法学者たちや長老たちと一緒に、イエスを侮辱して言った。42「他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば、信じてやろう。43神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。『わたしは神の子だ』と言っていたのだから。」44一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエスをののしった。

六月を迎えました。初めは戸惑ったであろう、この礼拝も随分と静粛の中で、落ち着いて進められているのをみて、大変に嬉しく思います。これまでを振り返って、司会の先生方が分厚い聖書の中から様々な聖書の記事を読まれて、その説き証しをされてきました。様々な記事から、い

ろいろなメッセージが語られてくる、その聖書の持つ深さや広さに驚いておられる方もいることと思います。

さて、そこでその礼拝に慣れてきた頃と思いまして、あえて主イエスの十字架の部分を選びました。一部分だけしか選んでいないのですが、今日お読みした記事の前後もかなり詳しく、丁寧に十字架にいたる道筋を記していることに驚くのであります。先ほどお読みしたところなどは、思わず読み進めるのが苦痛になるほどに、そこまで書かなくてもいいのではないかと思うくらいの描写で描かれています。なぜ、そこまで丁寧に、リアルに記したのでしょうか。実のところ、新約聖書にある４つの福音書を書いた目的こそが、この主イエスの十字架であるのです。本来は、生きたまま釘付けにするという残酷極まりない十字架という死刑でありますから、大方の人にとっては思い出したくもないし、触れたくない。ましてや主イエスが、その十字架にかかったとなると、なおさら思い出したくもないというのが人情であります。しかしながら今日、教会の屋根には必ず十字架が掲げられています。つまり、あえて掲げている、忘れないために、またそれをシンボルとすることで主イエスの十字架の死を特別視していることがわかるのであります。

さて聖書の記事であります。このマタイ福音書二七章前後を読みますと、すぐに気がつくことがあります。それは、主イエスが一言も語らないということです。ただ黙っておられる。周りの人々

に身を委ね、なすがままにされているだけであります。その主イエスの沈黙によって、余計なほどに浮かび上がるのが、主イエスの周りの人々の姿であります。つまり、マタイがここで語っているのは、主イエスの事というよりも、むしろ主イエスを十字架につけた人々のことであります。

そこで、本日のところにまず、最初に登場するのは総督の兵士たちであります。もう死刑が決まった、どうせ殺される犯罪人には何をしてもよい、と言わんばかりに徹底的にいたぶり苦しめ、楽しんでいるかのような雰囲気さえ伝わってきます。

まずここで、私たち人間は人をいじめる。また、人を苦しめる。そこに喜びを感じる残虐な心を持ちあわせていることを改めて知らされるのです。この兵士たちもおそらく、特別に残虐な人々だったとは言えなかったはずであります。家に帰れば、善良なよい家庭人であり、兵士という職業柄、協調性のある規律正しい人々であったはずであります。しかし一旦、このような立場と機会を得ると、普段は見えてこなくとも、本人も気付かなかったような残虐さが顔を出す。また自分一人ではないという集団心理も働いて、いとも簡単に平気で残酷なことをしてしまう。ですからこの、主イエスを徹底的にいたぶった兵士たちの姿は、実は私たち自身の中にある一つの面の現れであって、私たちは、そこに自分自身の姿を見つめなければならないと、まず思うのです。

ところで、もう一つの物語、主イエスの十字架を担いで歩いていく場面であります。映画とか

で何度か映像を見た記憶がある人もいるでしょう。ところが実際には、死刑囚が担がされたのは十字架の横木だけ、つまりクロスしている木の短い部分であったといわれています。確かに、人が貼り付けられるほどの大きな木を担いで歩くことは物理的にも不可能であります。しかも、その横木だけを担いでいく力も、既に主イエスには残っていなかったということが示されるのです。そこで、大変興味深い人物が登場します。主イエスの十字架を替わって担がされた人、シモンという名のキレネ人、現在のシリアにいた人物であります。兵士たちがたまたま彼に目を留め、主イエスの十字架を担いでいくように命令したのです。主イエスとは何の関わりもない、たまたまこの時エルサレムに、おそらくは巡礼のために来ており、たまたま主イエスがゴルゴタへと引かれて行くのに出くわしただけであったと思われます。しかしこのように兵士たちに無理強いされて、十字架を担がされたことによって、彼の人生に、主イエスとの関わりが生じました。主イエスと全く関わりのなかったシモンは、十字架を無理に担がされ、主イエスと共にゴルゴタまで歩かされるという体験を通して、後に主イエスを信じる者とされていったのです。死刑囚の担ぐべき十字架を担がされて一緒に歩かされるというのは、屈辱の体験です。沿道の人々の嘲りを自分も共に受けてしまうのです。ローマの兵士に逆らえば何をされるかわかりませんから、仕方なく従うとしても、事が終わればさっさと立ち去り、もう二度と思い出したくない、そういう体験だ

と言えるでしょう。

しかしながら、シモンは後に回心し、洗礼を受け、伝道者パウロを助け、教会の中心メンバーとして生涯を全うしたことが知られています。主イエスと一緒に十字架を担いで、共に歩いた。そうしてまでも、私を救おうとする、私を生かそうとする、私に生きることを促しておられる。迫害する者を徹底的にやっつける仕方ではなく、すべてを赦し続け、愛に生きることを身をもって示し続けた、まことの救い主との出会いがそこにあったのであります。そして今、時を超えて、現代の私たちにも、シモンの記事を通して同様に主イエスとの出会いが与えられるのであります。自分勝手に生きているのではなく、私たちは生かされて生きるていることを深く心にとどめたいと思うのです。

祈り、

主なる神。夕べの礼拝を感謝いたします。主イエスの壮絶な十字架の場面を読みました。背後に究極的な犠牲と愛を見るのであります。これからも私たち一人ひとり、生かされて、生きている恵みを覚えつつ歩ませてくださいますように。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。

「行ってあなたも同じようにしなさい」

東北学院榴ケ岡高等学校 宗教主任　西間木　順

ルカによる福音書　十章二五〜三七節

25すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」26イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、27彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」28イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」29しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。30イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。31ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。32同じように、レビ人もその場所にやっ

て来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。33ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、34近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。35そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』36さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」37律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

皆さんは、「善いサマリア人のたとえ」を知っているでしょうか。聖書の中に出てくる主イエスのたとえの中でも、有名なたとえですので、知っている方もいるのではないでしょうか。しかし、たとえ話よりも、主イエスと律法学者との問答に注目してみると、この箇所を通して、主イエス私たちに教えていることがわかりやすくなります。

今日の箇所に出てくる律法学者は、主イエスよりも自分が優位に立ちたい、あるいは自分の方が主イエスよりも優れていると考えていたのでしょうか。主イエスを試そうとして、質問をします。

「**先生、何をしたら永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか？**」もちろん、律法学者はこの答えを知っていたのであります。主イエスがどう答えるのか。律法学者のみならず、その場にいた人たちもまた興味を持って主イエスを見たのであります。しかし、主イエスは答えるのではなくて、逆に質問をします。「**律法には何と書いてあるのか。あなたはそれをどう読んでいるのか？**」人々の視線は律法学者に注がれます。どう答えるのか。律法学者は、答えます。「『**心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また隣人を自分のように愛しなさい**』とあります。」と。主イエスは、「**正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる**」と言われました。人々の関心は主イエスよりも、この律法学者がこれからどのような行動をとるのか、に変わっていくのであります。

律法学者は気付いたのであります。自分が主イエスを試そうとしたのに、自分が試されている。自分が優位に立とうとしているのに、かえって、不利な立場に追い込まれたと。そこで、律法学者は、自分の立場、すなわち、主イエスを試そうとする立場を取り戻そうとして、再び主イエスに質問するのであります。「**それでは、わたしの隣人とは誰ですか**」と。

みなさんにとっての「わたしの隣人」とはどのような人なのでしょうか。どうしても私たちは、自分中心で考えるのではないでしょうか。誰かが自分のために助けてくれる、自分の利益になる

ような行動をしてくれる、あるいは、自分の欲を満たしてくれる。そういう人が自分にとって隣人であって、そういうことをしてくれない人は隣人ではないと、考えてはいないでしょうか。ある意味隣人を自分が選んでいる、ということができます。そうすると「隣人愛」というとき、私たちは、おのずと愛する対象を選んでいる、ことになります。

それでは、主イエスは、私たちに、隣人について、隣人愛について、どのように教えているのでしょうか。善いサマリア人のたとえを見てみたいと思うのであります。

ある人が、エルサレムからエリコに下っていく途中、追いはぎに襲われた。そして、持っているものを取られ、半殺しにされた。その道を、祭司、レビ人、サマリア人が通ったのであります。祭司、レビ人は、神に仕え、神殿での祭儀を行う人たちです。その祭司もレビ人も半殺しにされて道に倒れている人を助けませんでした。それはなぜなのでしょうか。彼らはもともと助ける気がなかったのでしょうか。祭司にしろ、レビ人にしろ、憐れに思い、助けようとしたと思います。しかし彼らは考えたのであります。半殺しにされた人を助けることと、見て見ぬふりをすることと、どちらが自分にとって利益となることか。律法の規定には、もし死体に触れたら、一定の期間祭司の仕事、レビ人としての仕事ができなくなる、とあります。彼らが考えて選んだのは、自分の立場を優先することであります。助けない方が、自分にとって利益になる、と考えたのであります。

ですから、彼らは助けることなく、別の道を通って行ったのであります。

それに対して、サマリア人は違いました。彼は当時の応急処置をし、宿屋につれていき、一晩中介抱したのであります。そして、宿屋の主人に、自分の宿代のほかに、助けた人の分まで、しかも何日か分の宿代を払ったのであります。それだけではなく、費用がもっとかかったら帰りがけに払います、と言って、出かけて行ったのであります。彼は自分の利益を考えたのでありません。自分の利益ではなく、他の人の利益を考えたのであります。人の命を優先にしたということができます。

たとえを語り終わった主イエスは律法学者に問われます。「**だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか**」と。律法学者が主イエスにした質問「**誰がわたしの隣人か**」から変わったのに気付いたでしょうか。自分中心に考えるのではなくて、助けを必要としている人を中心に考える。私たちの周りにも弱い立場の人、助けを必要としている人、困難な生活を強いられている人がいます。私たちはこのような人々の隣人になれるのか。あなたは自分の利益ではなく、他の人の利益のために働けるか。主イエスはこのように私たちに問うているのであります。

主イエスは、最後に律法学者に言います。「**行って、あなたも同じようにしなさい**」と。この言葉は、私たちにも言われているのです。

東北学院の建学の精神には、「イエス・キリストにならう隣人への愛の精神を培い」とうたわれています。律法学者のように頭で、自分中心に隣人への愛を理解するのではなく、私たちの力を必要としている人の立場に立って、行動することを、東北学院は、求めているのでありますし、これが3L精神のLoveの精神なのであります。

祈り

父なる神

新しい命を与えてくださり、この学校に招いてくださり感謝いたします。

あなたの招きに応え、共に礼拝を捧げることができますことを感謝いたします。

どうぞ私たちが、自分の利益を考えるのではなくて、他の人の、特に私たちの力を必要としている人々の利益を考えて行動することができますように、力を与えてください。

すべてことをあたりまえと考えるのでなくて、どんなことにも感謝する心を与えてください。

この祈り　主イエス・キリストのみ名によって祈ります。

アーメン

「永遠の贖い」

宗教部長　佐々木　哲　夫

ヘブライ人への手紙　第九章一一～一四節

11けれども、キリストは、既に実現している恵みの大祭司としておいでになったのですから、人間の手で造られたのではない、すなわち、この世のものではない、更に大きく、更に完全な幕屋を通り、12雄山羊と若い雄牛の血によらないで、御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられたのです。13なぜなら、もし、雄山羊と雄牛の血、また雌牛の灰が、汚れた者たちに振りかけられて、彼らを聖なる者とし、その身を清めるならば、14まして、永遠の〝霊〟によって、御自身をきずのないものとして神に献げられたキリストの血は、わたしたちの良心を死んだ業から清めて、生ける神を礼拝するようにさせないでしょうか。

＊

私たちが用いている聖書の旧約聖書は、三九の書物〔巻物〕から成っています。二千年ほど昔、ユダヤの学者の間で、それらが神の言葉であるか否かについての議論がありました。彼らは、も

し神の言葉であるなら、それに触れると手が穢れる、神の言葉でないなら手は穢れないと言って議論しました。逆のように思われるかも知れませんが、真正な神の言葉に触れるなら手が穢れるのです。なぜならば、神の言葉の清さのゆえに、人の穢れが露にされるからです。

二千年ほど昔、ユダヤにおいて、もう一つ類似の出来事が起きました。イエス・キリストの誕生です。ヨハネ福音書は「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」と記しています。神の言葉が人となってこの世に到来した出来事です。イエス・キリストの誕生は神の言葉の受肉だというのですから、人の穢れすなわち罪を鮮明にするということでした。しかも、それだけでなく、イエス・キリストの誕生は、罪を消し去る完全な道をも示してくれたことにおいて顕著な出来事だったのです。

イエス・キリストによって開かれた新しい時代の意義について本日の聖書の箇所が説明しておりますので、ご一緒に学びたいと思います。

＊＊

さて、イエス・キリスト以前、旧約聖書の時代には、穢れの清めのために罪の贖いの儀式が神

殿で行われていました。例えば、人々は、犯した罪を自覚し、さまざまに定められた献げものを神に献げ、祭司が執り行う儀式によってゆるしや和解を得ようとしました。しかし、時には、人は自覚せずに罪を犯してしまうことがあります。また、神殿の祭司といえども人の子ですから、知らず知らずのうちに罪を犯したことと考えられました。そこで、年に一度、大祭司は、特別に贖罪の日を設け、自分の罪と人が見過ごしたすべての罪を清めるために、動物の犠牲を神にささげ、すべての人のためのすべての罪のゆるしの儀式を行ったのです。例えば、旧約聖書のレビ記は、「彼〔大祭司〕は、自分と一族のために、またイスラエルの全会衆のために贖いの儀式をおこなう」（十六・一七）ことを記しています。しかし、旧約聖書時代の贖罪は、完全なものではありませんでした。人々は、罪を犯す度に繰り返し献げものをささげたのでした。

本日の聖書の箇所は、イエス・キリストを、罪の贖いを司る大祭司に譬えています。要約して引用します。

キリストは、大祭司としておいでになり、この世のものではない完全な神殿で、御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられた。キリストの血は、わたしたちの良心を死んだ業から清めて、生ける神を礼拝するようにする。

この記述は、イエス・キリストの十字架と復活のことを暗示しての説明です。神の子が自らの身をささげ、人々の罪の贖いをなさったというのです。「ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられた」と記されているように、それは完全な贖い、すなわち、繰り返す必要のない、時空を超越して有効な永遠の贖いでした。

後年、犠牲をささげるのではなく、修行や苦行などの業をおこなうのでもなく、イエス・キリストの十字架と復活を信ずる信仰によってのみ罪のゆるしが得られることをマルチン・ルターが再発見したことはご承知のとおりです。イエス・キリストの到来は、罪のゆるしの成就が目的であったといって過言ではありません。十字架につくために生まれてきた神の子であると表現することもできます。

＊＊＊

さて、イエス・キリストの生涯を俯瞰することのできる時代に生きているわたしたちは、二〇一三年のクリスマスを、その本質においてお祝いしたいと思います。すなわち、今日におい

てもなお有効な罪の贖いの道が備えられた日という意味においてです。クリスマスの意義は、宗教的・信仰的範囲のなかに閉じ込められるものではありません。時空を超越し、それぞれの時代に対し問いかけをなし、倫理や道徳の基となりました。なんと多くの野心家が、この礎に取ってかわろうとしたことでしょう。

この礎が教育における礎にもなったことは言うまでもありません。東北学院もそうでした。東北学院は、キリスト教の本質を礎として築き上げられましたが、その価値観は、時空に閉じ込められるものでなかったのです。「永遠の贖いを成し遂げられた」イエス・キリストの基は、一二七年前にとどまることなく、二千年の時空を超越して働いているのです。東北学院の全人教育の教育は、確かな土台の上に築き上げられ、今日においてもなお用いられているのです。

「心の眼を開いてください」

大学宗教主任　野村　信

マタイによる福音書　二〇章二九～三四節

29一行がエリコの町を出ると、大勢の群衆がイエスに従った。30そのとき、二人の盲人が道端に座っていたが、イエスがお通りと聞いて、「主よ、ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください」と叫んだ。31群衆は叱りつけて黙らせようとしたが、二人はますます、「主よ、ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください」と叫んだ。32イエスは立ち止まり、二人を呼んで、「何をしてほしいのか」と言われた。33二人は、「主よ、目を開けていただきたいのです」と言った。34イエスが深く憐れんで、その目に触れられると、盲人たちはすぐ見えるようになり、イエスに従った。

皆さんは賀川豊彦という救貧活動や組合運動、平和のために活躍した、社会活動家の名前を聞いたことがあるでしょうか。一九六〇年に七五歳で亡くなっていますので、死後五〇年にもなり

ますから、最近あまり名前は聞かれなくなりましたが、大学の生協は、賀川とそのグループが組織を広げて、日本全国に展開した生活協同組合ですから、皆さんに全くなじみのない人ではないのです。

最近、賀川の書いた本を読んでいたら、「どのようにしたら神を感じることが出来るか」、という主旨の文章に惹き付けられました。賀川は熱心なクリスチャンで、牧師でもありましたので、もっと人々に神を知ってほしい、神に気づいて欲しい、と願ったのです。

本の中で、賀川は神を感じる方法は七つある、と言っています。第一は、大自然をよく見ること、第二に、大自然の美を知ること、第三は、自分の良心を見つめよ、第四は、人から親切を受けること、第五は、働くこと、第六は、聖書をはっきり読むこと、第七は、宗教的人格に接すること、と言っています。

神は私たちに大自然を通して、そして良心を通して、人々を通して、何よりも聖書を通して、神が分かるように示しておられます。しかし、もし分からないのなら、セットに問題がある、と言っています。つまり、受け取る側である私たち自身に問題があるということです。神がいくら働きかけてくださっても、受け取る私たちがあまりに鈍い、ないしは無頓着過ぎて、神が分からないというわけです。

これは、次のように語るといいかもしれません。

道を歩いていたら一羽の鳥が舞い上がったので、ああ、鳥が飛んでいると思ったけれど、そのまま通り過ぎてしまいました。しかし、とても眼の良い人なら、その鳥の名前が何であるか分かるかもしれません。例えば百万画素のカメラでその鳥を写せば、鳥が飛び立っている姿を写せるでしょう。しかし一千万画素のカメラで写すと、鳥がはっきりと映っていて、足に何かを掴んでいることが分かりました。巣から落っこちた雛を掴んで舞い上がり、巣へと運んでいくところだったのです。鳥は大きく口を開けて、なんだか喜んでいるようにさえ見えます。**つまり、見る人の目の感度が良ければ、もっと良く見分けることが出来るはずなのです。**

集音マイクを皆さんは使ったことがありますか。遠くの人の話が良く聞こえないので、感度の良いマイクをその人に向けると、はっきりその声が聞こえます。普通にしていても聞こえない言葉も、感度の良いマイクならはっきりとその言葉を聞きとれます。**つまり、聴く人の耳の感度が良ければ、もっと良く聞けるはずなのです。**

香水とか芳香剤などの良し悪しは、皆さんも関心があるでしょうが、ちょっとかいでも素人では分からなくても、匂いをかぐ専門家なら、違いが判別できるのです。**つまり、匂いを嗅ぐ人の鼻の感度が良ければ、もっと良く嗅ぎわけられるのです。**

さらに料理の味の良し悪しは、味覚の専門家なら、微妙な味を判別できるわけです。ワインなどもその味が美味しいか否かは、ソムリエと呼ばれる訓練した人には、その違いが分かるわけです。

つまり、**味わう人の舌の感度が良ければ、微妙な味もよく味わい分けられます。**

私たちは、いつの間にか、自分の感覚や能力を訓練したり、発達させることをせずに、人の判断にまかせたり、ぜんぜん気にもとめなくて、私たち自身が未発達であるということは大いにあり得そうです。

特に現代は、身の回りにあるあらゆる製品や道具が自動的に先に動いてくれるので、私たちは、ひょっとすると、自分の感覚を豊かにしたり、感度を良くして微妙な変化や信号を受け取るということができなくなっているということがあるかもしれません。

神は私たちに豊かに働きかけて下さっています。自然を通し、私たちの心を通し、大勢の人々を通して、何よりも聖書を通し、私たちにさまざまに働いてくださっています。だから、神が見えない、神の声が聞こえないとつぶやいたり、あきらめたりするのは、私たちのほうに問題があるのであって、私たちがもっと謙虚になり、神様、あなたが分かるように私を養ってください、眼が良く見えるようにしてください、と祈り、求める必要があります。

本日の聖書の箇所に、目の不自由な二人の人の話が出てきます。キリストが道を通ると聞いて、そのチャンスを待っていて、通りがかった時に、大声を上げて、「主よ、見えるようにしてください」と叫んだのです。すると主イエスは、すぐに目の不自由な人たちの目を開いてくださいました。

この出来事は、単に目の不自由な人々の話ではなく、私たち全人類の姿を暗示していると理解できないでしょうか。

神はどこにおられるのか、神が見えないと私たちは、しばしば言っていますが、私たちが見えないのです。私たちの目がぼんやりしていて、あるいはふさがっていて、よく見えないのです。そこで、「見えるようにしてほしい」と願うことが求められているのです。この聖書の出来事は私たちに、自分の目を見えるように求めなさい、と諭しているような気がしてなりません。

私たちは、神に祈って見えるようにしていただきましょう。そしてよく見るように努めましょう。私たちは、聞こえるようにしていただきましょう。そしてよく聞くように努めましょう。神は、大声で叫んでおられます。神ははっきりとご自身を私たちに聖書を通し、自然を通し、人々を通して示してくださっています。それをしっかりと感じ取り、受け止めるように、私たちが心がけ、私たち自身をよく鍛えることが大切ではないでしょうか。本日の聖書の出来事は、私たちに、もっと祈り、求めなさいと促していると思います。

「敵を愛せ」

大学宗教主任　原口尚彰

マタイによる福音書　五章四三～四八節

43「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。44しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。45あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。46自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあろうか。徴税人でも、同じことをしているではないか。47自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになろうか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。48だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」

マタイによる福音書五章の後半部分は、イエスの山上の説教の真ん中に位置しており、六つの

反対命題と呼ばれる教えが置かれています。反対命題と呼ばれているのは、まず、昔の人にこう言われているという言葉で、旧約聖書に記されているモーセの十戒の言葉が引用され、その直ぐ後に、「しかし、わたしは言っておく。」という導入句で始まるイエス自身の教えが述べられているからです。例えば、最初の反対命題を語るマタイ五章二一節と二二節では、「あなたがたも聞いているとおり、昔の人は『殺すな。人を殺した者は裁きを受ける』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。」となっています。さらに、第二の反対命題を語るマタイ五章二七節と二八節では、「あなたがたも聞いているとおり、昔の人は『姦淫するな』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、既に心の中でその女を犯したのである。」となっています。なかなか厳しい言葉です。こうした反対命題の最後が、先程読んだ、マタイ五章四三―四八節の言葉であり、「あなたがたも聞いているとおり、昔の人は『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」となっています。

この言葉はイエスの愛敵の教えとして有名ですが、その掲げる理想が非常に高いので、キリスト教の歴史の中で、本当に人間に実行が可能なのだろうかという声が絶えません。敵を憎む方が自然な人間の心ではないだろうか？人間が本当に敵を愛することが出来るのであろうか？身内を

敵に殺されたような場合にそれは不可能ではないだろうか？そもそも、反対命題は普通の人間には実行不可能であり、むしろ、実行できない人間の罪ある姿を露わにするのではないだろうかという声すらあります。しかし、使徒パウロが書いたローマの信徒への手紙の一二章一四節には、「あなた方を迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであって、呪ってはなりません」という言葉があり、初代教会の人々は、イエスの言葉を文字通りに受け取り、守っていこうという姿勢を持っていました。近代世界においては、一九六〇代のアメリカの公民権運動の指導者であったマルティン・ルーサー・キング牧師も、この言葉を自らの行動の指針にしていました。

「敵を愛せ」というイエスの言葉の前提は、敵の中に自分と同じ人間を見出すということではないかと思います。戦場において、二つの国を軍隊が対峙し、戦うとします。それぞれの軍隊には兵士がいて、指揮官の指令のもとに戦闘行為を行い、相手を攻撃し合うのですが、かれらとて人間であり、それぞれの人生があり、戦争が終われば、祖国の家族のところに帰って行く存在です。つまり、戦場で戦う相手は決して冷血なモンスターではないということが、出発点になります。私は一九七〇年代の終わり頃にアメリカに留学していた時に、中西部の方々の教会に招かれて日曜日の礼拝で説教して回ったことがありますが、その時に、自分の父親の世代は、兵士として戦場でアメリカ人と戦ったが、わたしはキリストを信じる兄弟として福音を分かち合うためにこの

場に立っていると言って説教を始めたことがあります。その頃は、会衆の中に戦争経験がある人々も沢山おり、話を聞く姿勢も真剣でした。日本軍と戦った経験がある人や、戦後に日本に駐留した経験のある年配の人達も多くいて、礼拝の後に握手を求めて来ましたが、国と国の戦争という不幸な過去を越えた、人と人の交わりの大切さを実感する機会となりました。

小説家の大岡昇平の代表作『俘虜記』は、著者が第二次世界大戦中にフィリピンで兵士として従軍し、降伏して捕虜になるまでのことを書いた作品ですが、その中で、敗走して逃走する途中でアメリカ人の若い兵隊に出くわし、大岡さんに気付いていない相手を容易に射殺することが出来たのに、そうしなかった体験を書いています。それは、極限状態の中で、相手の兵士に自分と同じ血の通った人間を見たからではないかと思います。かくして、彼は銃の引き金を引かず、その後、逃走中に意識を失って捕虜になったのでした。

イエスの愛敵の教えに話を戻せば、五章四五節以下は、「あなたがたの天の父となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたはどんな報いがあろうか。徴税人でも、同じことをしているではないか。自分の兄弟だけに挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになろうか。異邦人でさえ、同じことをしているのではないか。だから、あなたがたの天の

父が完全であられるように、あなた方も完全な者となりなさい」なっています。私たちが、天の父なる神にように「完全に」なることは、難しいのですが、少なくとも、対立する人々の中に自分たちと同じ人間を見出し、より寛容になることは可能ではないかと思います。日本は周辺諸国と領土紛争の渦中にありますが、対立する国々の人々に自分たちと同じ人間を見出し、互いの主張に冷静に耳を傾け合い、和解の道を探して行きたいと思います。

「思い悩む、なんてもったいない」

大学宗教主任　出村　みや子

ルカによる福音書　第一二章二二～三二節

22それから、イエスは弟子たちに言われた。「だから、言っておく。命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと思い悩むな。23命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切だ。24烏のことを考えてみなさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、納屋も倉も持たない。だが、神は烏を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりもどれほど価値があることか。25あなたがたのうちのだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。26こんなごく小さな事さえもできないのに、なぜ、ほかの事まで思い悩むのか。27野原の花がどのように育つかを考えてみなさい。働きもせず紡ぎもしない。しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。28今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことである。信仰の薄い者たちよ。29あなたがたも、何を食べようか、何を飲もうかと考えてはならない。、また、思い悩むな。30

それはみな、世の異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの父は、これらのものがあなたがたに必要なことをご存じである。31ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる。32小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。

学生の皆さんは、子供と大人の違いがどこにあるか、考えたことがありますか。いろいろな答えがあると思いますが、本日の聖書の文脈で言えば、思い悩みがあるかどうかもその答えのひとつではないでしょうか。聖書をご覧ください。今お読みしたルカによる福音書一二章二二―三二の箇所には、四回も「思い悩む」という言葉が繰り返されています。二二節には「命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと思い悩むな」、二五節では「あなたがたのうちの誰が、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか」二六節では「なぜ、ほかの事まで思い悩むのか」、そして二九節では再び二二節で語られた主題が繰り返され、「何を食べようか、何を飲もうかを求めてはならず、思い悩んではならない」と語った主イエスの言葉が伝えられています。

学生の皆さんの多くは、将来の就職に向けて様々な準備をしており、おそらくは自分の未来のことを真剣に考えつつ、将来のより善い選択をしようと勉学に励んでおられることでしょう。そんな中で、子供の頃には経験しなかった様々な思い悩みを抱えるようになった学生もおられるかもしれません。なぜなら親は子供を養育するために必死で働き、不況の時には職場を失うかもしれないと頭を悩ませることもあるかもしれませんが、子供は大抵の場合、そのようなことには全くとらわれることなく、明るく気ままに日々を過ごす特権を与えられているからです。しかし大人になるということは、それでは済まなくなるということです。子供が大人になるということは、毎日の着るものについても、住む場所のことも、日々食べていくことも、衣食住のすべてにわたって自分の責任でやっていかなければならないということを意味しています。つまり、大人になるということは子供の時には持たなかったような思い悩みを抱くようになるということなのです。言いかえれば日々の思い悩みは大人のしるしであり、皆さんが大人になったということの証しなのです。

しかし本日選びました箇所において主イエスは、大人として当然日々の事柄に思い悩まない訳にはいかないわたしたちに対して、繰り返し「思い悩むな」と告げているのです。ここには、現代人が学ぶべき「健全な楽観主義」とでも呼べるようなメッセージが告げられているように思い

ます。それではイエスはなぜわたしたちに「思い悩むな」と告げることができたのでしょうか。

まずイエスはわたしたちに「何を食べようか、何を飲もうかと思い悩むな」と言って、日々の基本的な思い悩みをやめるように勧めていますが、それは二三節にあるように「命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切だ」からです。考えてみれば、わたしたちが食べるのは身体的な生命を維持するためであって、わたしたちの命のほうが食べ物よりも大切なことは言うまでもありません。またわたしたちが衣服を着るのは体を保護するためであって、わたしたちの体のほうが衣服よりも大切であるのも当然のことです。食べ物や衣服そのものが大切なのではなくて、その食べ物によって養われる命、その衣服によって保護される体の方が大切なのであって、グルメやファッション性にばかり気をとられてはいけないのです。イエスは、この命や体をわたしたちに与え、養ってくださる神が、食べ物や衣服以上であるのは当然のことではないかと言われ、身近な鳥や野原の花に目を向けるようにとわたしたちに促しています。わたしたちに与えられている命の大切さ、心身の健康を保つことの重要さ、このことをもう一度わたしたちは自然の生き物や植物の営みから学び、受け止め直す必要があるかもしれません。バランスを欠いた食生活や過度なダイエット、健康を損なう喫煙は、たとえどんなファッションで身を包もうとも、皆さんが本来持っている人間的魅力を低下させ、見えにくくしてしまうからです。それはとてももった

いないことだと思いませんか。

二五節をご覧ください。イエスは「あなたがたのうちのだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか」と告げています。神との特別な関係において創造され、烏（カラス）や野原の花よりも「どれほど価値があることか」と言われている人間が、日々の些細な思い悩みにとらわれ、くよくよと心配ばかりしているとすれば、それはとてももったいないことです。なぜなら、実際くよくよと心配したからといって、それで少しでも寿命を延ばすことのできる人は誰もいないからです。むしろ「寿命が縮む思いがする」という表現すらあるように、思い悩んだからといってどうにもなるものでもなく、かえってストレスに満ちた生活は心身の健康にとって有害ですらあるからです。

イエスは自分の悩みで心がいっぱいになり、自分を客観視できなくなってしまうわたしたちに対して、その狭い視野を広げ、外の広い世界に目を向けるように促しています。そこには現代社会では嫌われ者の烏（カラス）や、普段は人が目をとめることもない野原の雑草すらも、しっかりとその生命を支え、守り、養っている天の父なる神の働きが随所に認められるからです。二九節をご覧ください。人目につかない場所でひっそりと咲き、明日には枯れてしまうかもしれない小さな野の花をも、神が、あの栄華を極めたソロモンの人工の美にまさる自然の美をもって装っ

てくださるならば、野の花よりもずっと優れた人間であるあなたがたを、神はそれ以上に配慮していて下さるのだと、イエスはわたしたちに教えているのです。

二九節ではもう一度最初のテーマである「何を食べようか、何を飲もうかを求めてはならず、思い悩んではならない」という言葉が繰り返されます。主イエスは地上の富に自分の生の基盤を置くのではなくて、わたしたちの生命の源である天の父に生の基盤を置くような人生を歩みなさい、と勧めています。わたしたちが地上の富に基盤を置くときには、それを確保し、守ろうとして、いわば戦いの姿勢で日々を過ごすことになってしまい、心に安らぎを得ることができなくなってしまいます。イエスはそうした生き方は、「世の異邦人が切に求めている」生き方だと言います。ここでの異邦人とは、このような天の父なる神の存在を全く知らない人のことを指しています。すべてを与え、守り、導いて下さる神の存在を知らなければ、この地上のことがすべてであり、地上の富や安全を確保することに必死になるでしょう。ですから最後に三四節でイエスは、「あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ」と結んでいるのです。

学生の皆さん、どうか主イエスがわたしたちに教えて下さった「健全な楽観主義」を心に留めながら、これからの日々を大切に過ごしていって下さい。

「心の貧しさを知る」

大学宗教主任　村上みか

マタイによる福音書　五章二一～二六節

21「あなたがたも聞いているとおり、昔の人は『殺すな。人を殺した者は裁きを受ける』
と命じられている。22しかし、わたしは言っておく。兄弟に腹を立てる者はだれでも裁き
を受ける。兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』という者は、火
の地獄に投げ込まれる。23だから、あなたが祭壇に供え物を献げようとし、兄弟が自分に
反感を持っているのをそこで思い出したなら、24その供え物を祭壇の前に置き、まず行っ
て兄弟と仲直りをし、それから帰って来て、供え物を献げなさい。25あなたを訴える人と
一緒に道を行く場合、途中で早く和解しなさい。さもないと、その人はあなたを裁判官に
引き渡し、裁判官は下役に引き渡し、あなたは牢に投げ込まれるにちがいない。26はっき
り言っておく。最後の一クァドランスを返すまで、決してそこから出ることはできない。」

最近、ストーカー殺人事件やネットストーカー事件が話題になりました。そのほかにも親が子

を、また子が親を殺す事件もあり、毎日のように痛ましい事件が報道されています。このような事件の背景にはネット社会や高齢化社会、また経済的に困難な社会の問題が複雑に絡み合ってあり、その中で満たされない思いをもち、行き詰った人間が、その思いを他者に向けて傷つけてしまう、そのような状況があるようです。しかし、人が人を傷つけるのは今の時代だから起こることではなく、これはいつの時代にも人間の社会に常に起こってくる現象であるようです。聖書にも、その最初の創世記の初めに、すでに人が人を殺す物語が出てきます。有名なカインとアベルのお話です。そしてさらに十戒には、「殺してはならない」という言葉が出てきます。このような話が生まれ、このような戒めが古代イスラエル社会に存在していたということは、逆に言うと、そこに人が人を殺すと言う現象が存在し、それが社会の大きな問題と受け止められていたということでしょう。古い時代から、人が人として存在し、人とともに生きていく中では、必ずこのような出来事が起こってくるようです。このような事実を改めて思うと、人間の社会というのは愛を実現することの難しいところなのかと、嘆かわしい思いになります。皆さんも、このような現実に心を痛めることがあるでしょう。しかし、このような現実を痛み、悲しく思うことがあるにせよ、私たちは、このような出来事は私自身の周囲に起こることではなく、殺人といった行為は、私には関係のない、一生、私には起こりえないものであると、どこかで思っていないでしょうか。そ

してこのような形で人を傷つける人間は悪い人間、極悪な人間で、自分とは違う人たちだと思っていないでしょうか。

そのような私たちの無意識の思いを打ち砕くのが、先に掲げたイエスの言葉です。イエスは言いました。「人を殺した者は裁きを受ける」と言われているが、兄弟に腹を立てる者は誰でも裁きを受ける。兄弟に「ばか」と言い、「愚か者」という者は裁きを受けるのだ、と。

人を殺すということは、そう頻繁に身近に起こることではありませんが、人に「ばか」という程度なら、日常生活の中でよくあることです。友達や家族とけんかして「ばか」と言ってしまうことは、誰でも身に覚えのあることでしょう。しかし、イエスはこの日常的な「ばか」という発言と、人を殺すという行為が、同じように罪に定められるものであるというのです。なぜでしょうか。

それはイエスが人間の見える行為でなく、目に見えない人間の心を問題にしているからです。つまり人を殺す行為も、「ばか」と言う行為も、同じように人に対して攻撃的な行為、人を傷つける行為であり、その根底には人を受け入れることの出来ない狭い心、貧しい心があるということなのです。人間というのはどうしても自分のことをまず考えてしまい、他者を自分の中になかなか受け入れることの出来ない生き物です。誰もがそのような心の貧しさを抱えて生きています。

だから、何か自分の手に負えないことが起こると、何か自分に都合の悪いことが起こると、それを自分の中で受け止めることが出来ず、それが他者への攻撃となって表れてくるのです。したがって、そのような貧しい心、弱い心に気づかずにそのままにしておくと、今は人に「ばか」という程度で終わっていても、状況によってはこの攻撃が激しいものとなり、何らかの拍子に人を殺してしまうかもしれない、そのような可能性があることをイエスの言葉は教えています。根っこにあるものが同じであるわけですから、それがある限り、それがいつ形をとって現れてもおかしくないということです。

このように聖書は目に見える人の行為でなく、目に見えない心の問題、正確に言うと魂の罪を問います。皆さんもすでにキリスト教学の授業や礼拝で「罪」について何度も聞かれていると思いますが、この「罪」の問題は日本人にとって難しい問題であると言われます。日本人はなかなか自分の罪ということが分からない、というのです。この日本人特有の精神風土をカトリック作家の遠藤周作は、その小説のテーマとしました。彼は『黄色い人』や『海と毒薬』という小説の中で、神をもたない日本人は自分の中で善悪の葛藤をもつことがなく、そのためにあいまいな行動をとってしまう、その様子を描きました。つまり日本人は神の前に立って自分のなす行為や語る言葉が適切なものであるのか、良いことであるのかを問うことがなく、なんとなく周囲に流さ

れて生きており、人を傷つける行為を行っても、どこかで悪いなと思いながら、仕方がない、こんなものだ、と済ませてしまう、あいまいなところで行動し、あいまいに済ませてしまう、というのです。このような日本人はしたがって倫理的に良い行為を積極的に行うことがなく、その行動は不気味だ、と遠藤周作は言うのです。

たしかに、私たちの心のあり様を思い返すと、そのようなところがあるかもしれません。「赤信号、みんなで渡ればこわくない」という言葉がありますが、これはまさに遠藤周作が指摘する日本人のあり方を表しているようです。そのような私たちに、先のイエスの言葉は、人間の罪の問題をわかりやすく教えてくれているように思います。罪なんて、と思うかもしれませんが、私たちの日常に現われる心の貧しさをよく知り、それと向き合っていくことを学んで、人としての豊かなあり方がはじめて開かれてゆくのです。

聖書の言葉は、難しく分かりにくいものもありますが、このようにして私たちの心に問いかけ、その中で私たちの心は少しずつ養われていくのです。キリスト教学の授業や礼拝で聖書の言葉に触れながら、心を養うときを大切にもちたいと思います。

「アドヴェント（待降節）における謙遜の姿」

大学宗教主任　原田浩司

ルカによる福音書一章二六〜三八節

26六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。27ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった。28天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」29マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。30すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。31あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。32その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。33彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。」34マリアは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」35天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力

があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。36あなたの親類の
エリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたの
に、もう六か月になっている。37神にできないことは何一つない。」38マリアは言った。「わ
たしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」そこで、天使は去っ
て行った。

今年二〇一三年もクリスマスの季節を迎え、キャンパスの礼拝堂もクリスマス・ツリーが飾られています。千年に一度と言われる、あの未曾有の被害をもたらした東日本大震災から数えて、今回は三年目、三度目のクリスマスとなります。わたしたちは、あの時、これまでの常識では到底考えられないような出来事を目の当たりにし、またここにいる皆さんも、それぞれの場所であの震災を経験しました。この経験は生涯忘れることなく、私たちは様々な形で語り継いでいくことでしょう。そして今、こうしてわたしたちが祝うクリスマスも、これまでの常識では到底考えられないような出来事でした。しかし、それは起こり、こうして歴史の中で綿々と語り継がれ、受け継がれ、祝い続けられている。それがクリスマスです。

今日の聖書の言葉、ルカによる福音書では、天使ガブリエルが処女マリアの前に現れ、そして彼女に身ごもって男の子を生むこと、そして、生まれてくる子どもをイエスと名付けるようにと告げる、受胎告知と呼ばれる有名な場面です。この時マリアも、常識では到底考えられない出来事に遭遇したわけです。天使が目の前に出現するとか、受胎告知であるとか、マリアの常識を超えています。この時マリアは驚いて、「そんなことがあるわけない」といぶかしい反応を示しています。しかし、天使はここで「神にできないことは一つもない」と告げ、マリアは「わたしは主のはしためです。お言葉通りにこの身になりますように」と言って、天使の言葉を受け入れました。この受胎告知の場面で、マリアが発したこの最後の一言がとても重要です。「わたしは主のはしためです。お言葉通りにこの身になりますように」。

皆さんはビートルズというイギリスのバンドをしっているでしょうか？ ビートルズの有名な曲のタイトルに「レット・イット・ビー」があります。最初の歌い出しの歌詞は「When I find myself in times of trouble, mother Marry comes to me, speaking words of wisdom, let it be.」という一節です。「僕が困難に陥っている時、母マリアが僕のところに来て、賢明な言葉、知恵ある言葉を言うんだ、レット・イット・ビーって」。これは作詞を担当したポール・マッカートニーの実の母親がマリアという名前なので、自分の少年時代を振り返りながら作った歌であるとも言えま

すが、ここで言う「マザー・メアリー」は、イエスの母マリアを暗示していると解釈することができます。母マリアがどんな賢明な言葉を言っているかというと「レット・イット・ビー」。受胎告知の場面で、マリアは天使に言いました。「わたしは主のはしためです。お言葉通り、この身になりますように」。これを英語で表現すると、「Let it be to me according to your word.」。様々な英語聖書がありますが、ネストレー＝アーランドという定評あるギリシア語＝英語対訳聖書では、そのように訳されています。「レット・イット・ビー」。なぜこの言葉が賢明な言葉、知恵のある言葉なのか。この言葉は「なるようになる」や、逆に「なるようにしかならない」といった、いささか投げやりな意味ではなく、マリアが、天使を通して、神の力に触れ「神さまの御心、神さまの御言葉がなりますように」と、そのように神の前にへりくだる、その謙虚な姿勢、謙遜の姿の中に、この言葉の真意があると言えるでしょう。

クリスマスに起きた出来事とは、神が人間の肉体をとり、人間の赤ちゃん、つまり人間の中で最も弱く、最も無力な存在になったという出来事です。神は神であるにもかかわらず、自分をそれほどまでか弱く、小さな存在となるまでに、自分を低めた出来事です。聖書がわたしたちに示す神は、人に仕えるために、自らへりくだる神です。自分を弱く、小さくすることのできる神です。わたしたちよりも下に立ってくださる神です。下に立つ。「下に、立つ」を英語で言い表せば

「アンダー・スタンド」です。神はわたしたちの下に立ち、そして私たちの痛みや悲しみ、苦しみも喜びも、理解する（アンダースタンド）神です。マリアは「レット・イット・ビー」と言う前に、こう言っています「わたしは主のはしためです」。マリアも神様の前では、自分は「はしため」にすぎない、と心から遜り、「下に立って」言った言葉が「レット・イット・ビー」です。

今日は御一緒に、この受胎告知の場面から、へりくだるマリア、そしてへりくだる神に思いを馳せました。今日こうして、クリスマスを迎え、祝うわたしたちは、自らへりくだり、わたしたちの下に立つために、この世にお生まれになったイエス・キリストを覚えます。そして、改めて、神の前に謙遜に、へりくだるということが、この世界を生きるわたしたちにとって、どれほど知恵のある生き方であり、また賢明な生き方であるのか。そのことを思わずにはいれません。文明の進化や、科学技術の進歩の陰で、わたしたちが見失ってきたのは、そのような姿ではないでしょうか。クリスマスの季節の中で、わたしたちは今一度、神さまの前にへりくだり、神さまの御心を信じて「レット・イット・ビー」と受け入れた一人の少女マリアの姿を通して、それが、わたしたちがイエス様を迎え入れる上で、とても大切な姿であることを覚えたいと思います。

「幻なき民は亡ぶ」

総合人文学科長　北　博

箴言　二九章一八節

18 幻がなければ民は堕落する。
教えを守る者は幸いである。

創世記一七章一節によれば、アブラハムが九十九歳になった時に神が現れ、「あなたはわたしに従って歩み、全き者となりなさい」と語りかけました。もっとも、前半を直訳すると「あなたは私の前を歩きなさい」となるのですが（新改訳や以前の口語訳はそう訳しています）、それでは日本語として誤解される恐れがある、ということで新共同訳はこのような意訳にしたのでしょう。後半で「全き者」と訳されているヘブライ語のターミームという語は、創世記六章九節にも出てきますが、新共同訳はこちらについては「無垢な人」と訳しています。ノアは神に従う（ツァッディーク、義に生きる人）無垢な人（ターミーム）で、「神と共に歩んだ」、とされます。

二十世紀を代表するユダヤ人思想家マルティン・ブーバーによれば、ターミームという語は完璧さではなく、統一的な全体性であり、その結果どの部分も残りの他の部分と違って見えないことを意味しています。ブーバーによると、創世記一七章一節のアブラハムに対する神の語りかけは、申命記一八章一三節の「あなたは、あなたの神、主と共にあって全き者（ターミーム）でなければならない」という民に対する要求と呼応しています。

ところで、ヘブライ語の中でこのターミームと概念的に類似するのが、シャーレームという語です。これは、一般に「平和」と訳されるシャーロームと同語根の語で、この形容詞が人間に関して用いられる場合、内面的無矛盾性、つまり心の平安を意味することが多いようです。

統一王国時代、ソロモンはエルサレムに神殿を建設し、その中に「神の箱」を安置しました。その奉献祈祷の末尾、列王記上八章六一節前半でソロモンは、民に対して次のように呼びかけます（新共同訳はここをかなり意訳していますので、私がヘブライ語聖書から直接訳出した訳文を使わせていただきます）。「あなたたちの心は、私たちの神、主と共にあって、平安（シャーレーム）でなければならない（傍点筆者）。

このソロモンの祈りに見られる「心の平安」の強調は、王国時代に生じた或る変化を物語っています。それは、アブラハムの信仰の矮小化、つまり生の全体性に対する神の要求を、心の問題

に限定しようとする動きです。このような動きに対して聖書は、列王記上一〇章一四節以下でソロモンの王としての振る舞いを問題視しながら（申命記一七章一四－二〇節と比べてみて下さい、ここは王への批判です！）、列王記上一一章四節で彼の宗教混交的不誠実さに対する指弾に続けて、「彼の心は彼の父ダビデの心のようには、彼の神、主と共にあって平安（シャーレーム）ではなかった」と言い切ります（ここも私がヘブライ語原文から訳出しました）。先ほどの列王記上八章六一節のソロモン王の民への呼びかけを読んだ後では、「彼の心は平安ではなかった」という言葉は何とも皮肉に響きます。列王記を更に続けて読むと、ソロモン王の治世末期、国の内外で様々な離反が始まり、結局ソロモンの死後間もなく王国は分裂してしまうことが描かれています。

ところで箴言二九章一八節には、「幻がなければ民は堕落する。教えを守る者は幸いである」という言葉が記されています。「堕落する」と訳されている語は、新改訳では「ほしいままにふるまう」、以前の口語訳では「わがままにふるまう」、文誤訳では「放縦す」と書いて「ほしひままにす」とルビがふってあったと記憶しています。おそらく、生きる方向性を見失って「放縦にふける」、というぐらいの意味だろうと思います。「教え」と訳されているトーラーは、通常「律法」と訳される語です。トーラーは、法概念だけでは括れない広い意味を持っているので、新共同訳はここでは「教え」と解釈したのでしょう。トーラーを守る者は健全だ、というほどの意味でしょう。

エゼキエル書七章二六節には、幻は預言者、律法は祭司がそれぞれ担う領域である、という考えが述べられています。イスラエルの伝統において、預言者と祭司はそれぞれ異なる役割を担ってきましたが、両者の役割は相互補完的でもありました。預言者は幻、すなわち将来進むべき方向性を示し、祭司はトーラーによってその具体的道筋を示し、このようにして民は日々の生活の営みの中で、一歩一歩目標に向かって進んで行くのです。

しかし英国欽定訳（King James Version）は、箴言二九章一八節の前半を「幻がなければ民は亡びる（perish）と訳しました。これは少々訳し過ぎだとは思いますが、この訳は後世に影響を与え、様々な局面で用いられました。例えば最近亡くなった女性神学者のドロテー・ゼレは、この箇所をそのまま題名にした神学書を出版しています（*Ein Volk ohne Vision geht zugrunde.* 邦訳『幻なき民は滅ぶ』新教出版、但し本稿ではどちらの副題も省略）。方向性を見出せない民、すなわち烏合の集団は、各人が目先の利害や自分の都合だけでそれぞれ身勝手な行動に走り、その結果自滅してしまうものである、という意味なら、この訳もあながち見当違いではないと思います。聖書の誤訳がそのまま名言となった例は、いくらでもあります。私はこの訳が結構気に入っています。

ところで、ここの「幻」という語は、「志」と言い換えてもいいかもしれません。志とは、ある

方向性に対する強い思いです。エジプトを出て行ったイスラエルの民は、志を共有する人の群れでした。そしてこの民は、シナイ山の麓で神と契約を結び、誓約共同体として新たな出発をしました。したがってイスラエルの民にとって、契約は根本的なものでした。しかし志を具体化し、人々を志に沿った行動へと促すためには、組織化とルール作りが必要になります。イスラエルにとってのトーラーの重要性は、ここにあります。

しかし、創始者や初期の同志達の高い志が矮小化され、本来の精神とは似て非なるものに堕してしまうことは、歴史の中で繰り返されています。ソロモン王の振る舞いも、その一つでした。この堕落は、皮肉にも志を実現するために作られた組織やルールが硬直化し、それ自体を自己目的化する時に始まります。換言するなら、その組織に属する人々が組織に対して守りの姿勢に転じ、それを形式的に守ろうとのみ努める時、組織は既に解体と滅亡の方向に向かっているのです。

或る群れが、矮小化された志をあたかも最初からのものであるかのように掲げ、硬直化した組織を維持することにのみ汲々とする時、その群れは危機に瀕している、と考えるべきではないでしょうか。高い志を失い、あるいは共有できなくなった時、人の絆で成り立っている共同体は結局、何かのきっかけで雲散霧消してしまわざるを得ないのです。「幻なき民は亡ぶ」というこの言葉は、よくよく噛みしめてみるべきではないでしょうか。

by the needs of blind Bartimaeus. When Bartimaeus came to Jesus, Jesus said to him, “What do you want me to do for you?” Believing that Jesus was, indeed, the Son of God, Bartimaeus asked simply if Jesus could make him see. In response to Bartimaeus’ faith, Jesus healed his blindness, and Bartimaeus began a new life as a man who could see.

What a lesson it must have been for all who witnessed this amazing encounter. Jesus, the Son of God, was not too busy or too preoccupied to recognize and respond to the needs of a man who had little to hope for in this world. As a result, Bartimaeus’ life was changed and he began to follow Jesus Christ.

Do you, too, sometimes feel that you have little or nothing to hope for in life? If you do feel this way, I hope that you will be like Bartimaeus, and open up your heart and mind to God. The only true and lasting hope is the hope we can receive through faith in Jesus Christ. This is the kind of hope that can change your life just like it changed the life of poor, blind Bartimaeus. You can receive this hope by simply believing in Jesus Christ, just as Bartimaeus did. That is my prayer for you today.

had very little to look forward to in life. Most of them had little reason to hope for anything more than a few gifts that would allow them to buy the things they needed just to survive. This is probably how Bartimaeus lived day after day. On this day, however, Jesus came walking by the place where Bartimaeus was sitting. Actually, Bartimaeus had probably heard about Jesus before. At this time, Jesus was so popular that he was, no doubt, often the topic of conversation as people walked by the place where Bartimaeus sat. Bartimaeus had probably overheard many of these conversations.

Though he had heard about Jesus, Bartimaeus had probably never thought that he would ever actually get to meet, and yes, even see, Jesus. Imagine his excitement when he heard that Jesus was nearby. He could hardly control himself and called out, "Jesus, Son of David, have mercy on me!" When the people around Bartimaeus heard him, they told him to stop causing such a disturbance and to be quiet. However, Bartimaeus stubbornly called out all the more, "Jesus, Son of David, have mercy on me." Finally, some people told him that Jesus had heard him and wanted to see him. Bartimaeus was happy beyond words. He jumped up and came to the place where Jesus was. At this point, in the midst of all the commotion, Jesus turned away from the large crowd of people following him, to recognize a poor, blind beggar. With much on his mind and much work to do, Jesus was distracted

the Jewish people and also among many Gentiles (non-Jewish people).

One day, Jesus was leaving a town called Jericho. His disciples were with him, and many other people were also following him. You can just imagine the commotion that undoubtedly resulted from so many people coming to see this famous person and following him wherever he went. There must have been great excitement. No doubt some of the people had actually seen Jesus teach and perform miracles. Others, perhaps, had only heard accounts of Jesus' teaching and miracles from other people. All of these people, however, were very excited that Jesus was there with them. They followed Jesus around, listening enthusiastically to what he said and probably hoping to witness one of Jesus' miracles.

In all the excitement, however, there was one man who was largely being ignored by the people who were following Jesus. This man's name was Bartimaeus, and he was blind. Though we don't know all the details of this encounter, I think that Bartimaeus had probably been sitting by the side of the road for many years. Day after day after day, there he sat—listening as people went by, hearing their conversation about many things that he would never be able to see or do because he was blind and poor. Every day Bartimaeus sat there and begged, hoping to get a few coins to buy a little food to help him get through another day. In the ancient world, blind people

と一緒に、エリコを出て行こうとされたとき、ティマイの子で、バルティマイという盲人の物乞いが道端に座っていた。

ナザレのイエスだと聞くと、叫んで、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と言い始めた。

多くの人々が叱りつけて黙らせようとしたが、彼はますます、「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と叫び続けた。

イエスは立ち止まって、「あの男を呼んで来なさい」と言われた。人々は盲人を呼んで言った。「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ。」

盲人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た。

イエスは、「何をしてほしいのか」と言われた。盲人は、「先生、目が見えるようになりたいのです」と言った。

そこで、イエスは言われた。「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」盲人は、すぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った。

MESSAGE: “Distracted by Love”

I never get tired of reading this account of Jesus’ meeting with blind Bartimaeus. The meeting took place during a time in Jesus’ life when he was very popular. People were anxious to see Jesus. They wanted to hear him speak. Also, many had witnessed or at least heard about the many healing miracles Jesus had performed. Because of this, they often brought sick or handicapped people to Jesus so that Jesus could heal them. Jesus was becoming a very well-known teacher among

English Chapel Service

文学部教授　David N. Murchie（マーチー　デイビッド）

SCRIPTURE READING: Mark　10:46-52（マルコによる福音書 10:46～52）

46 Then they came to Jericho. As Jesus and his disciples, together with a large crowd, were leaving the city, a blind man, Bartimaeus (that is, the Son of Timaeus), was sitting by the roadside begging. 47 When he heard that it was Jesus of Nazareth, he began to shout, “Jesus, Son of David, have mercy on me!

48 Many rebuked him and told him to be quiet, but he shouted all the more, “Son of David, have mercy on me!

49 Jesus stopped and said, “Call him.

So they called to the blind man, “Cheer up! On your feet! He’s calling you.” 50 Throwing his cloak aside, he jumped to his feet and came to Jesus.

51 “What do you want me to do for you?” Jesus asked him.

The blind man said, “Rabbi, I want to see.”

52 “Go,” said Jesus, “your faith has healed you.” Immediately he received his sight and followed Jesus along the road.

（訳）

一行はエリコの町に着いた。イエスが弟子たちや大勢の群衆

「十字架の愛」

経営学部教授　松村尚彦

ローマの信徒への手紙　第五章六～八節

6実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。7正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれません。8しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。

皆さんは「夜回り先生」という方を知っていますか？「夜回り先生」とは、数年前まで夜間高校の先生をしていた水谷修先生のことです。水谷先生は、夜遅くまで歓楽街を徘徊している若者たちを見回り、声を掛け、話を聞き、時には罵声を浴びせられながらも、そうした若者たちとの関わりを続けてこられた方です。

夜の街を徘徊する若者たちは、一般的には「悪い子」「問題のある子」と見られがちです。しかし夜回り先生が関わった若者たちの多くはそうではなかったといいます。夜回り先生が時間をかけて話を聞くうちに、「悪い子」というのは表面的な見方であり、、実際にはその心の内に「帰るところがない」「心配して待っていてくれる人がいない」といった、どこか寂しさをもった子供たちが多いことに気づいていくのです。

付き合ってきた若者の何人かは、摂食障害、リストカット、窃盗、薬物依存、傷害事件、やくざや暴走族などに走り、とても苦労をされたそうですが、夜回り先生は、どんなキツイ場面であっても決して逃げませんでした。逃げてしまっては、生徒からの信頼を失うことになるからです。

ある時、こんなことがありました。横浜中華街近くのパチンコ屋の裏で、一人の少年が何人もの店員から袋叩きにされていたのです。事情を聞くと、この少年は糸に釣り下げた磁石で、不正にパチンコの玉を集めていたということが分かりました。そこで夜回り先生は、直ぐに自分が高校の教師であることを告げ、少年に代わって許しを乞うて、どうにかその場を切り抜け、彼を家まで送り届けます。

しかし、この少年は、その後も悪さを止めません。あるときとうとう夜回り先生のところへ、母親が泣きながら電話をかけてきました。「息子が暴力団に入った」と。風呂に入るために服を脱

いでいる息子を見たとき、背中に刺青があるのを発見したのでした。
驚いた夜回り先生は、直ぐにこの少年の所へ出掛けて行きます。すると、少年は好奇心で暴力団に入ったけれど、毎日こき使われるだけの日々に嫌気をさして暴力団を辞めたいと思っていることが分かりました。そこで夜回り先生は、組長と直接交渉をするために、勇気を振り絞って少年と二人で組の事務所にでかけていきます。しかし意外なことに「二度と自分たちの縄張りに入らない」ということを条件に、組長はすんなりと、組を辞めることを認めてくれました。
これで全て終わってホッとしたはずでした。しかし1ヶ月後、今度は組長から夜回り先生に電話がかかってきます。電話の向こうで組長が怒っている気配がします。そして「少年が縄張りに入ったから捕まえている」という声が耳に入ってきました。
直ぐに事務所に行くと、少年が真っ青な顔をして震えています。その前で険しい表情をしている組長が座っている。そんな緊張した場面で組長がこう言ったそうです。
「水谷さん、こっちもメンツを商売にしてるんだ。約束を破ったからには、こいつには、それなりのことをしてもらうからな！」
やくざの世界で、これは、少年の指を詰めるということを意味しています。それを聞いて水谷先生は、とっさにこう答えました。「この少年の代わりに、自分の指を落としてください」

今夜回り先生の利き腕には、指が一本ありません。少年の身代わりとなって、少年を守ってくれたのです。少年は一生このことを忘れることはないでしょう。水谷先生の本には、今この少年が中華料理の店で真面目に働き、将来は自分の店をもつことを目標にして頑張っていると書かれていました。水谷先生の、この少年に対する愛が、彼を救ったのです。そこには、ひとりの人間を、目覚めさせ、立ち返らせる、大きな愛がありました。

さて、今皆さんと一緒に礼拝を守っている礼拝堂のここに十字架があります。この十字架には、どんな意味があるのかご存知でしょうか？

十字架とは、手足を釘で打ちつけられて木に吊るされる、非常に残酷で苦しい刑罰です。聖書は、キリストがこの過酷な刑罰をお受けになって苦しまれたと伝えています。それは、私たちが犯した罪を償うためでした。

ちょうど水谷先生が、一人の少年のためにご自分の指を犠牲とされたのと同じように、キリストは、私たちのために、自らを犠牲にして命を捧げられました。十字架はその私たち一人一人に対する神様の愛を表しているのです。

私たちクリスチャンは皆、この神様の愛によって生かされているのだと信じています。皆さんはこれまでに何度か十字架をみたことがあるでしょう。このキャンパスの礼拝堂にも十字架があ

りますし、街の教会にも十字架が立てられています。今度それを見たときには、今日のお話を思い出していただけたら良いなあと思います。

「馳せ場を走る」

工学部教授　星宮　務

ヘブライ人への手紙　十二章一節

1こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびただしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走りぬこうではありませんか、

フィリピの信徒への手紙　三章十二～十四節

12わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がイエス・キリストに捕らえられているからです。13兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思ってはいません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、14神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。

ヘブライ人への手紙　十一章一節

[1]信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。

オリエンテーション・キャンプでの開会礼拝を始めます。皆さんは、東北学院大学に入学して初めて、キリスト教の礼拝に接した方もいらっしゃるでしょう。礼拝で歌う讃美歌には、皆さんが良く耳にするメロディーもたくさんあります。たとえば、４月２日の最初の礼拝堂での讃美歌１５８番はベートーベンの第九交響曲「喜びの歌」でした。また入学式の時に歌った讃美歌２８５番は「魔弾の射手」という曲の前奏部分として良く知られております。

本日歌いました讃美歌３７０番は、もちろん皆さんがご存知の「蛍の光」のメロディーです。讃美歌の右上の３７０という数字のすぐ下を見ますと、〝Auld Lang Syne〟（作曲者 Burns）、スコットランド・メロディーと書いてあります。

一方、右下を見ますと「ピリピ　３．１４」と書いてあります。この讃美歌の出典が、今日お読みした聖書の箇所であるフィリピの信徒への手紙　３章一二～一四節であることを示しています。

私はキリスト教の専門家ではありませんので、聖書の根本的な意味をギリシャ語の原典からお伝えすることはできません。それで、本日は讃美歌の歌詞と、それの元となった聖書の箇所からアプローチしてみようと思います。

さて、３７０番の歌詞を見てみましょう。人々が陸上競技場で競技をするところが想像されます。ただ注意して読みますと、１番の後半に「いのちの冠」という言葉と「天に行く馳場」という言葉があります。つまりオリンピックのような競技で、月桂樹で作られた優勝の冠を目指すのとは、少し違うようです。

２番の歌詞を見てみましょう。この箇所は本日読みましたヘブライ人への手紙１２章に出てくる記述、「おびただしい証人の群れに囲まれている」、「すべての重荷や絡み付く罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競争を忍耐強く走りぬく」という表現に対応していると思います。

３番のところには、「黄金のかむりも光ぞなき」という表現がございます。ウェーバーという社会科学者は地位や金銭などの現世的な価値とは対決する宗教的な態度に対して「宗教的現世拒否」という用語を用いています。私は全くの素人ですが、讃美歌の歌詞に表現される精神態度は、人間と神との関係のみを重視し、この世の中でもてはやされる価値には重きを置かない、という点

において、両者は同じもののように感じられました。

このような点にだけ注目すると、キリスト教という宗教は、現在私たちが置かれている競争的な環境から離れるように、一見感じられるかもしれません。しかし、それだけではありません。

ヨーロッパの中世におけるカトリックの考え方では、修道院の中で世の中の価値観から離れて神さまの事だけを考えて生活することを理想としてきました。しかし、宗教改革によって生まれたプロテスタントでは、受け止め方が違います。かえって現実にあるこの世の中で、自分の仕事を一生懸命に行って生きる事が、そのまま神の栄光を表す道だと考えています。

プロテスタントのキリスト教の考え方を私たちの生活における競争に即してわかりやすく言えば、現実の陸上競技で優勝することも、永遠に朽ちない冠を得るために神の前で真剣に生きることも、両方とも実現しよう、という欲張ったアプローチ、と言うこともできるでしょう。

科学技術に例をとれば、キリスト教大学では、キリスト教の教育と高等教育の場である大学としての進んだ研究を、同時に矛盾なく実現すべきものと、私は思っています。

本日読みましたもう一つの聖書の箇所に注目しましょう。ヘブライ人への手紙一一章では、「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認すること」と書かれています。見えるも

のだけを重要視する態度とは、決定的に異なっております。

現実に観察されるデータだけを重要視しようとする科学の立場でも、自分の立脚点を絶対視することが、どれくらい危険であるか。皆さんは、一昨年の3月11日に起こった東日本大震災によって起きた原子力被害を思い起こせば、「原子力が絶対安全という神話」が如何にもろいものであったか、お分かりになると思います。

まだはっきりと実証されてはいないが、起きる確率が0ではない「見えない真理」の存在を考える知的な謙虚さは、現実の問題でも必要でありますし、そのような知的な謙虚さが、科学技術を支えている、と私は強く思います。

私ども、東北学院大学の土樋にある図書館の本館の入り口には、文語体の言葉で

「エホバを畏るるは知識の本なり」

という言葉が刻んでありますが、全能の神の前に立って謙虚である姿勢こそが、本当の意味で科学技術を「あやうさ」から守ってくれるものだと、思います。

大学生活をスタートしよう、とされる皆様には、常に「目覚めて」いて、陸上競技にも例えられている、学びのマラソンを、「絡み付く重荷を振り払って」、「忍耐強く走りぬき」、最後には、

謙虚な気持ちに支えられた学問的な実力という「朽ちない冠」を手にされるように、これからの大学生活での努力を続けていただくことを望んで、開会礼拝の言葉といたしたいと存じます。祈ります。

「遊女の悲劇」

工学部機械知能工学科准教授　長島慎二

列王記上　三章十六節～二十八節

16そのころ、遊女が二人王のもとに来て、その前に立った。17一人はこう言った。「王様、よろしくお願いします。わたしはこの人と同じ家に住んでいて、その家で、この人のいるところでお産をしました。18三日後に、この人もお産をしました。わたしたちは一緒に家にいて、ほかにだれもいず、わたしたちは二人きりでした。19ある晩のこと、この人は寝ているときに赤ん坊に寄りかかったため、この人の赤ん坊が死んでしまいました。20そこで夜中に起きて、わたしの眠っている間にわたしの赤ん坊を取って自分のふところに寝かせ、死んだ子をわたしのふところに寝かせたのです。21わたしが朝起きて自分の子に乳をふくませようとしたところ、子供は死んでいるではありませんか。その朝子供をよく見ますと、わたしの産んだ子ではありませんでした。」22もう一人の女が言った。「いいえ、生きているのがわたしの子で、死んだのがあなたの子です。」さきの女は言った。「いいえ、死んだのはあなたの子で、生きているのがわたしの子です。」

二人は王の前で言い争った。23王は言った。「『生きているのがわたしの子で、死んだのはあなたの子だ』と一人が言えば、もう一人は、『いいえ、死んだのはあなたの子で、生きているのがわたしの子だ』と言う。」24そして王は、「剣を持って来るように」と命じた。王の前に剣が持って来られると、25王は命じた。「生きている子を二つに裂き、一人に半分を、もう一人に他の半分を与えよ。」26生きている子の母親は、その子を哀れに思うあまり、「王様、お願いです。この子を生かしたままこの人にあげてください。この子を絶対に殺さないでください」と言った。しかし、もう一人の女は、「この子をわたしのものにも、この人のものにもしないで、裂いて分けてください」と言った。27王はそれに答えて宣言した。「この子を生かしたまま、さきの女に与えよ。この子を殺してはならない。その女がこの子の母である。」

28王の下した裁きを聞いて、イスラエルの人々は皆、王を畏れ敬うようになった。神の知恵が王のうちにあって、正しい裁きを行うのを見たからである。

本日読みました聖書の箇所は、今から三千年ほども昔、イスラエルの地で強力な統一国家を築

いたソロモン王の時代の話です。ふたりの遊女がいました。好んで遊女になったはずもありません。不幸な境遇であり、彼女たちを支える家族が無かったのでしょう。ふたりは、ふたりだけで助け合って生活をしていました。そして、ふたりは同じ頃に妊娠をしたのです。今読んだように、わずか三日をおいてふたりとも赤ん坊を産みました。やはり私生児だったのでしょう。この場面には父親の姿はありません。しかし、ふたりにとって子を持つことはどんなにか喜びであり、また希望であったことでしょう。女性にとって子を産み育てることはすばらしい生き甲斐であることに違いありません。他人から見下げられて来たこれらふたりの遊女にとって、人間として、女性としての最大の働きがそこにはありました。自分たちも子をもうけることができる。この子は誰のものでもない、わたしの子だと、そのような気持ちだったのではないでしょうか。

しかし、悲劇が起こったのです。ふたりとも疲れ果てていたのです。わたしも出産に立ち会いましたが、出産は本当に大変なことです。ふたりがほぼ同時に出産をしたのです。しかも他に誰もいなかったのです。遊女の一人が、眠ったときに赤ん坊に寄りかかって子を死なせてしまいました。疲れ果てて、子が泣いても気が付かなかったのでしょう。おそらく子を死なせてしまった遊女は半狂乱になったでしょう。到底この悲劇を受け入れることは出来なかったのです。この事件は力を合わせて生きてきたふたりの遊女の間も引き裂いたのでした。

さて、訴えを聞いたソロモン王は、それなら、剣でもって赤ん坊を引き裂いてふたりに分けよと命じます。しかし、生きている赤ん坊の母である遊女は「王様、お願いです。この子を生かしたままこの人にあげてください。」と頼んだのでした。

旧約聖書のなかで、この僅かな分量の物語が、ただソロモン王の知恵を示すだけのものなのでしょうか。実は、わたしも子を失っていますので、それ以来この物語は理屈抜きにこころに沁みるようになりました。

聖書は不思議な書物です。いろいろな物語があって、理屈の上では理解できますが、こころで理解することは難しいことです。逆に、わたしたちは現実的な体験を通して、聖書の言葉がこころに沁みたりするものなのです。わたしは子を失ったときに最初に思い浮かんだ言葉は、ヨブ記に記されているヨブの言葉です。子を失ったヨブが、「主は与え、主は奪う」と嘆いた言葉です。命の全権が神にあることを思い知らされました。一方で、ヨブ記の末尾を読むと、ヨブは、再び子供に恵まれていることがわかります。それは聖書的には祝福なのかもしれません。いわばハッピーエンドであると読むべきなのかも知れません。しかし、子を亡くしたわたしにとっては、そのようには思えないのです。どんなに新しく子に恵まれたとしても、その子は決して亡くなったこどもの代わりにはならないのです。おそらくはヨブは死ぬまで、亡くした子を、痛みをもって

こころに留め続けたことでしょう。

さて、あらためて言いますが、わたしにとっては今読みました聖書の箇所は、子を失って以来こころに残った場面です。今日読んだ悲劇は、ソロモンの知恵を示すと同時に親の限りない愛を示していると思います。どんなに大変な境遇にあっても、親は、特に女性は命をかけて子供を愛するものなのです。

そして、私たちは知らなければなりません。神がそのひとりごを、わたしたちに与えてくださったことをです。神の子が、赤ん坊の姿でこの世に降ったのです。一体何処に、死刑台にかけんがために子をもうける親がいるでしょうか。イエス・キリストは十字架にかからんがために、赤ん坊の姿でこの世に降りて来られたのです。盲人の目を癒し、泣いている人と共に泣き、足の不自由な者を歩かせ、罪人とともに食事をし、むち打たれ、唾を吐きかけられ、殴られ、愚弄され、そして十字架にかかられたのです。このことがみなさん一人一人にとって、自分のこととして受け止めることが出来るとき、イエス・キリストはみなさんの救い主となるでしょう。祈りましょう。

「ある日の音楽礼拝」

大学オルガニスト　今　井　奈緒子

五月二十日（月）土樋キャンパス ラーハウザー礼拝堂　司会

［讃 美 歌］　３１２番　５４１番

［聖書箇所］　ミカ書　六章八節

［演奏曲目］　Ｍ．ヴェックマン（1621-74）コラール編曲「来たれ聖霊、主なる神」（一、二節）

（前奏）　Ｊ．Ｓ．バッハ（1685-1750）コラール編曲「来たれ聖霊、主なる神」BWV652（演奏）

Ｊ．Ｓ．バッハ：コラール編曲「来たれ、創り主なる聖霊の神よ」BWV667（後奏）

昨日の日曜日、全世界のキリスト教会はペンテコステ（聖霊降臨）の出来事を記念し祝いました。ペンテコステは教会の誕生日だからです。「来たれ聖霊、主なる神」は中世の賛歌をマルティン・ルターが翻訳し旋律をアレンジしたコラール（ドイツ語の賛美歌）です。一方、古いラテン語のアンティフォナ「聖霊よ来たりたまえ」は15世紀にドイツ語訳され、それを同じくルターが旋律とともに拡大して「来たれ、創り主なる聖霊の神よ」というコラールになりました。今日演奏す

るのはこの2つのコラールに基づくオルガン編曲です。聖霊は炎のごとく力強く歌われることもあれば、静かに語りかけるように表現されることもあります。前奏は北ドイツで活躍したヴェックマンの勢いのある編曲で、一方同じ旋律をバッハは、舞曲風の落ち着いた曲想で歌わせます。バッハによる2作品は、その晩年にライプツィヒで成立しましたが、いずれもヴァイマル時代の旧稿が存在しています。バッハはかつて作った自分の作品をもう一度取り出して推敲し、より良いものにするよう努めたのでした。

十一月十五日（金）泉キャンパス礼拝堂　司会：野村 信 大学宗教主任

［賛 美 歌］ 501番　542番

［聖書箇所］ 旧約聖書　イザヤ書　第五十五章　第一～三節

［演奏曲目］ J．S．バッハ（1685～1750）クラヴィーア練習曲集第3部より「これぞ聖なる十戒」BWV678（前奏）「深き淵より、われ汝に呼ばわる」（演奏）「これぞ聖なる十戒」BWV679（後奏）

バッハはその生涯で、何度も「就活」をしています。教会や宮廷のオルガニスト、楽長、ある

いは市の音楽監督の募集を探し、自分のスキルを示す作品や演奏を通して職を得、こうして幾つかの都市を渡り歩いてその地で長期短期にわたって働きました。最後の就職先は三十八歳から生涯を閉じるまでのライプツィヒです。この地でバッハは聖トマス教会音楽監督を務める傍ら、鍵盤音楽の分野で作品の集大成と出版を成し遂げました。「練習曲」とは当時、一定の目的によって体系化された作品を指し、今日の演奏曲が含まれるクラヴィーア練習曲集第三部は特に、オルガンで演奏することが意図されています。

キリスト教の教えを問答形式で説く書物を『教理問答』といいます。バッハ時代の学校では毎朝、教理問答がひとつずつ教えられ、それらに対応するコラール（ドイツ語の讃美歌）を歌うことになっていました。月曜日の教えは「十戒」、金曜日の教えは「悔い改め」。今日は十戒と悔い改めのコラールをバッハがオルガン用に編曲した作品を演奏します。

十二月九日（月）土樋キャンパス ラーハウザー礼拝堂　司会：佐々木 哲夫 宗教部長

［賛 美 歌］　２６番、５４１番

［聖書箇所］　ヨハネによる福音書　三章三十一節～三十四節

［演奏曲目］　Ｊ．Ｓ．バッハ（1685-1750）コラール編曲「いざ来ませ、異邦人の救い主」

BWV659

（前奏）　G．ベーム（1661-1733）アリア「イエスよ、あなたはあまりに美しく」によるパルティータ（演奏）　G．フリューゲル　コラール編曲「高く戸を上げよ」（後奏）

アドヴェント（待降節）第二週が明けました。中世の賛歌をルターがドイツ語訳したコラール「いざ来ませ、異邦人の救い主」の歌詞は「…処女の子として生まれ、神がこのような誕生を準備されたことに、全世界は驚嘆しています」と続きます。素朴ながら、暗い冬の闇に暖かなローソクの光が灯るようなこの旋律が、バッハに味わい深い編曲を書かせることとなりました。

ベームは、北ドイツのハンザ都市リューネブルクにある、聖ヨハネス教会オルガニストを務めました。その頃バッハは同じ町の聖ミヒャエル教会付属学校に通っており、ベームの確立したコラール書法はバッハに少なからぬ影響を与えています。パルティータとは変奏曲のことで、ベームはこれらを礼拝用にも、家庭用音楽としても考えていました。「イエスよ、あなたはあまりに美しく」の優しい旋律から紡ぎ出される十四の変奏を、オルガンの音色を様々に組み合わせて演奏します。

教会の暦はアドヴェントから始まるので、ドイツの賛美歌集には今も昔も、最初にアドヴェン

トの歌が並んでいます。旧賛美歌集の第1番は「いざ来ませ、異邦人の救い主」でしたが、現行賛美歌集〝Evangelisches Gesangbuch〟ではこの「高く戸を上げよ」に替わっています。「高く戸を上げよ」は詩編二四編第七節「城門よ、頭を上げよ とこしえの門よ、身を起こせ。栄光に輝く王が来られる。」の言葉をキリストのエルサレム入城に重ね、この世にキリストを迎えるアドヴェントの賛美歌として十七世紀前半に作られました。このコラールがすぐれて音楽的なことから、多くのオルガニストたちが編曲を手がけています。

「人生を変える秘訣パートⅣ」

教養学部准教授　大澤史伸

マルコによる福音書一三章二十八節～三十一節

28「いちじくの木から教えを学びなさい。枝が柔らかくなり、葉が伸びると、夏の近づいたことが分かる。29それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。30はっきり言っておく。これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない。31天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」

みなさん、こんにちは。私は教養学部地域構想学科の教員で大澤史伸と言います。大学では、「社会福祉概論」、「福祉サービス論」等を教えています。

ところで、みなさんは、サッカーの試合を見たでしょうか？そうです、二〇一三年の六月四日のオーストラリア戦です。本田圭佑（ほんだけいすけ）選手が試合後半終了間際にＰＫ（ペナルティーキック）を決め、ブラジルワールドカップ出場を決めました。

私は本田圭佑選手の大ファンです。彼は、一九八六年六月十三日に大阪府摂津市出身のプロサッカー選手です。現在、ロシア・プレミアリーグでミッドフィールダー、フォワードとして大活躍をしています。

私はサッカー選手としての本田選手はもちろん好きですが、彼の話す言葉が大好きです。彼は、プライベートでは、いつも両腕に腕時計をつけています。ある時、「なぜ、腕時計を両腕にはめているのか？」について尋ねられた時、本田選手は「誰が時計は片腕って決めたん？」と言っていました。でも、本当は、「一つはロシア時間、もう一つは日本時間」だそうです。

また、彼はこんなことも言っています。「一年後の成功を想像すると、日々の地味な作業に取り組むことができる。」とか、「オレは、神様はいると信じてる。今まで、オレが苦しんでいる時、必ず神様は後でご褒美をくれた。」

いずれにしても本田選手の言葉は私たちにいろいろなことを教えてくれていると思います。

さて、それでは、聖書の神であるイエス・キリストはどんな言葉を言っているのでしょうか？共に学んでいきたいと思います。

聖書を開いて下さい。マルコによる福音書第十三章二十八節からです。聖書の後ろの方の八十九ページからです。もう一度読みます。

「いちじくの木から教えを学びなさい。枝が柔らかくなり、葉が伸びると、夏の近づいたことが分かる。それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。はっきり言っておく。これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない。天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」

これはイエス・キリストが私たちに語っている言葉です。このところから自分の人生を変える秘訣について学んでいきたいと思います。ポイントは三つあります。

第一に、「いちじくの木から教えを学びなさい」とあります。私たちは先生や親や友達から学ぶことが多いかと思いますが、イエスは「いちじくの木から教えを学びなさい」と言っています。これはどういうことかと言うと、私たちは動物や植物からもいろいろなことを学ぶことができるということです。つまり、自分を取り巻く全ての状況から学ぶことが大切であるということです。

私たちは、何か、大学に行けば学ぶことができる。本を読めば学ぶことができると思ってはいないでしょうか。そんなことは、ありません。私たちは自分を取り巻く全ての状況から学ぶことができるのです。赤ちゃんからも小さな子供からも自然環境からもです。そのためのポイントは、

聖書にもあるように、「悟ること」つまり、「気づくこと」が大切です。このことも忘れてはいけません。

第二に、「はっきり言っておく。これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない。」とあります。これはどういうことかというと、「これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない。」ということは、逆に「これらのことがみな起こると、この時代は絶対滅びる」と言い換えることもできます。つまり、時代はもちろんですが、私たちの人生も必ず終わりがあるということです。

人間はいつか必ず死にます。国が滅びることもあります。このことは、ニュースを見るまでもなく、歴史を学ぶなかでも知ることができます。どんなに、すごい人でも死に、どんなに強い国でも滅びるのです。私たちは必ず死ぬのです。だから、本当に自分のしたいこと、しなくてはならないことのために生きなくてはならないのです。イエスは、大切な教えの一つとして、このところで時間には必ず終わりが来るということを私たちに語っているのです。

第三に、イエスは、「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」と言っています。このことから私たちが学ばなくてはならないことは、「滅びないもの」つまり、「決して無くならないものを求める」ことが大切であることが分かります。

例えば、就職もそうです。どこの会社に入るということが目的となってしまうと、会社はいつかなくなることもあります。でも、会社ではなくて決して無くならない分野、業種で選ぶならば、たとえ、会社がなくなっても、転職をすることが可能になります。

私は、今、自分がやっている「社会福祉」や「キリスト教」というものが決して無くならないと考えています。例えば、社会福祉の知識や技術はどこの国も社会も必要です。もちろん、キリスト教も今まで二〇〇〇年以上も続いているので無くなるということは考えられないですよね。自分の人生を無くならないもののために使っていくことが大切です。

最後にこんな話をして終わりたいと思います。アメリカに、デール・カーネギーという人がいました。彼は、大学を卒業してから、教師、俳優、セールスマンなどをしますが、どの仕事も上手くいきませんでした。彼は、ベッドに横になって、いろいろなことを考えました。

今日も話したように、デール・カーネギーは、自分の今までの人生を振り返りながら学びました。そして、限りある自分の残りの人生を決してなくならない「話し方」と「悩み」を解決するための仕事をしたのです。それが、今、全世界で開かれている「デール・カーネギーコース」の学びです。あのアメリカの歴史で最も有名な大統領であるジョン・ケネディーや世界一のお金持ちであるウォーレン・バフェット氏なども卒業生です。

また、デール・カーネギーの書いた「人を動かす」、「道は開ける」、「心を動かす話し方」は、全世界で常にベストセラーになっています。もちろん、日本でもそうです。ちなみに、東北学院大学の生協にも置いてあります。

いずれにしましても、今日の聖書にあるように、私たちは、自分を取り巻く全ての状況から学ぶこと、時間には終わりがあることを知ること、無くならないものを求めることによって、自分の人生を最高に生きていこうではありませんか。あなたのためにお祈りをします。

編集後記

大学宗教主任　原田浩司

二〇一三年度に東北学院大学の礼拝で語られた説教の選集、『大学礼拝説教集』第十八号を皆様にお届けできることを心から喜ぶと共に、この説教集に寄稿していただいたお一人おひとりに感謝いたします。

東北学院大学では、前・後期合わせて三十週の講義期間が設けられています。この間、土樋、泉、多賀城の三つのキャンパスでは、月曜日から土曜日まで、第一時限目と二時限目を挟む時間帯に大学礼拝が行われています。また、大学の三つの寄宿舎でも、週に一度、夕礼拝が行われています。通常の御言葉の説教による礼拝以外にも、音楽礼拝や英語礼拝なども行われています。ここに収録された説教は、この一年間に各キャンパスなどの礼拝で実際に語られた数多くの説教の中のごく一部です。ですが、各説教者たちがどのようにして聖書のメッセージを（福音を！）学生たちに伝えようとしたのか、その葛藤と努力と工夫の痕跡をしっかりと感じ取ることができる説教が集まりました。福音書からの説教が多くなりますが、詩編、箴言、パウロ書簡に黙示録など、とても多様な説教が語られています。

二〇一三年度は、三年次のキリスト教学Ⅱが通年の科目から半期の科目へと移行したことも大きく影響してか、土樋キャンパスでは特に、礼拝出席者数の大幅な減少がみられました。キャンパスを問わず、東北学院大学で学ぶ学生一人ひとりが本大学の「建学の精神」を理解し、そして、よりよく生きようとする心を養う大切な機会としても、礼拝へ参加してくれることを切に願います。

東日本大震災から三年が経過しました。被災地に立つキリスト教大学として、この大学礼拝をとおして、確かな希望と光を証し、真の慰めを伝える働きができるよう、上よりの支えと導きを、祈り願うばかりです。

大学礼拝説教集

第　十八　号

二〇一四年三月三十一日発行

発行責任者　宗教部長　佐々木哲夫
編集責任者　大学宗教主任　原田　浩司
出　版　社　株式会社　アクトジャパン
問い合せ先　東北学院大学
宗教事務課
〒980-8511　仙台市青葉区土樋一の三の一
☎〇二二・二六四・六四二八